米沢市埋蔵文化財調査報告書 第12集

弦将寺

米沢市教育委員会

### 米沢市埋蔵文化財調査報告書

# 法将寺遺跡

昭和60年2月

米沢市教育委員会

本報告書は、米沢市経済部農林課の民有林林道開設事業小峽線開設工事に伴って、本市教育委員会が昭和58年7月から8月まで実施した、法将寺遺跡緊急発掘調査の成果をまとめたものであります。

法将寺遺跡から、縄文時代前期及び中期の竪穴住居跡を始めとして早期、前期、中期の土器、土偶、石器などの多くの遺物が発掘されました。中でも、縄文時代前後の住居跡は置賜地方でも発掘例が少なく、集落構成を研究する上でも貴重なものであります。また、縄文早期の土器群も関東地方の影響がみられ、これまで福島県以南でのみしか発見されなかった常世式土器がこの法将寺遺跡で初めて出土しております。

今回の調査から、繩文時代において、この地方が関東方面の文化圏と広域 な文化交流があったことが判りました。また、この遺跡の面積が約8万㎡に およぶ大複合遺跡であることも推定されました。おそらくは、八幡原遺跡群、 戸塚山古墳群とともに本市を代表する遺跡のひとつと言えましょう。

本市数育委員会におきましては、これらの遺跡群をふくめて数多くの埋蔵 文化財の保護保存に努力してまいる所存であります。本書が埋蔵文化財に対 するおおかたのご理解の一助になれば幸いと存じます。

最後になりましたが、米沢市経済部農林課並びに地元万世町梓山地区の皆様に心から感謝申しあげます。

昭和60年1月

米沢市教育委員会

教育長北月て部



# 例 言

- 1. 本報告書は昭和58年7月17~同年8月18に実施した,米沢市万世町梓山から同関根小峡に通ずる林道小峡線の開設工事に伴う緊急発掘調査の報告書である。
- 2. 発掘調査は米沢市教育委員会が主体となって、米沢市経済部農林課と協議のうえ実施したものである。
- 3. 調査体制は次の通りである。

調査総括 黒田信介 米沢市教育委員会社会教育課長

調査主任 手塚 孝 調査担当

現場主任 菊地政信

同副主任 亀田昊明

調 查 員 小松佳子, 樋口真紀

調查補助員 佐藤嘉広,中島正己,我妻徳枝

作 業 員 我妻清五郎, 佐藤秀司, 我妻新蔵, 我妻宮一, 黒田孝一, 梅津保子

事務局長 引地孝忠

事務局員 木村琢美, 金子正廣

調查協力 佐藤 保,我妻 実,地元地権者,米沢市経済部農林課

- 4. 挿図の縮尺は遺構を60分の1,40分の1,土器の実測図,拓影図を3分の1,石器の実測図を1.5分の1,礫を3分の1,5分の1とした。写真図版は,完形土器については縮尺不同,土器片,石器をそれぞれ2分の1とした。挿図に用いた北の方向は真北に統一した。
- 5. 本書の作成は手塚 孝が中心になり、菊地政信、亀田昊明、小松佳子が補佐し、編集は手塚 責任校正は木村琢美、森谷幸彦がその責務に当った。

# 本 文 目 次

序	文							
題	字	佐田 宥郭	篾 ( 法将寺	住職)				
例	言							
1	遺跡	の概要						 1
2	調査	の経過						 1
3	検出	された遺材	冓					 4
	1)第	III層面の道	貴構				•••••	 4
	2)第	II層面の道	貴構					 11
4	出土	.遺物						 25
	1)土	.器						 26
	2)石	器						 44
5	まと	Ø						 56
				揺	DVI	П	1/10	
				挿	図	目	次	
第1	义	法将寺遺蹟	亦周辺の遺	跡分布図				 2
第 2	図	法将寺遺蹟	亦グリッド	配図				 3
第3	図	法将寺遺蹟	亦遺構全体	図(1)				 5
第4	図	法将寺日'	Y 50平面図					 6
第5	図	法将寺H'	Y51平面図					 7
第6	図	法将寺H'	Y 52平面図					 9
第7	図	法将寺遺跡	<b>弥遺構全体</b>	図(2)				 10
第8	図	法将寺H`	Y 49平面図					 12
第9	図	法将寺遺記	<b>화BY126</b>	平面図…				 14
第10	)図	法将寺遺品	<b></b> 歩埋設土器	遺構平面	i図			 15
第1	1図	法将寺遺記	<b>弥土壙平</b> 面	図(1)				 16
第1:	2図	法将寺遺足	<b>弥土壙平面</b>	図(2)				 17
第13	3図							18
第1	4図	法将寺遺足	弥土壙平面	図(4)				 19
第1	5図	法将寺遺足	弥土壙平面	図(5)				 20
第1	6図	法将寺遺記	跡土壙平面	図(6)				 21

第17図	法将寺遺跡土塀平面図(7	)		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	22
第18図	法将寺遺跡遺構内出土遺物	y (1)					29
第19図	法将寺遺跡遺構内出土遺物	y (2)				•••••	30
第20図	法将寺遺跡遺構内出土遺物	g (3)					31
第21図	法将寺遺跡遺構内出土遺物	g (4)				•••••	32
第22図	法将寺遺跡遺構内出土遺物	g (5)				•••••	33
第23図	法将寺遺跡遺構内出土遺物	J (6)				•••••	34
第24図	法将寺遺跡遺構内出土遺物	g (7)					35
第25図	法将寺遺跡遺構内出土遺物	J (8)					36
第26図	法将寺遺跡遺構内出土遺物	y (9)					37
第27図	法将寺遺跡遺構内出土遺物	J (10)					38
第28図	法将寺遺跡遺構内出土遺物	7 (11)					39
第29図	法将寺遺跡遺構内出土遺物	J (12)					40
第30図	法将寺遺跡包含層出土遺物	, (1)					41
第31図	法将寺遺跡包含層出土遺物	1 (2)					42
第32図	法将寺遺跡包含層出土遺物	1 (3)					43
第33図	法将寺遺跡出土石器実測図	(1)					52
第34図	法将寺遺跡出土石器実測図	(2)					53
第35図	法将寺遺跡出土石器実測図	(3)					54
第36図	法将寺遺跡出土礫実測図(	1)					55
	付	丰	: П	\ht			
	11	表	Н	次			
第1表	法将寺遺跡遺構計測分類表		•••••				24
第2表	法将寺遺跡出土石器計測分	·類表··					45
第3表	法将寺遺跡出土石器計測表	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •					49
	$\boxtimes$	正二	: 1	Shr			
	凶	hЖ	]目	人			
第一図版	5 法将寺遺跡の発掘(一)						
	第Ⅲ層面遺構全景						
	第II層面遺構全景						
第二図版	え 法将寺遺跡の発掘(二)						

H Y 51全景

H Y 52全景

第三図版 法将寺遺跡の発掘(三)

HY50全景

BY136 全景

第四図版 法将寺遺跡の発掘(四)

HY49全景

I Y94全景

第五図版 法将寺遺跡の発掘(五)

DY13遺物出土状況

DY3全景

第六図版 法将寺遺跡遺構出土の土器(一)

第七図版 法将寺遺跡遺構出土の土器 (二)

第八図版 法将寺遺跡遺構出土の土器(三)

第九図版 法将寺遺跡遺構出土の土器(四)

第十図版 法将寺遺跡遺構出土の土器(五)

第十一図版 法将寺遺跡遺構出土の土器 (六)

第十二図版 法将寺遺跡遺構出土の大器(七)

第十三図版 法将寺遺跡遺構出土の大器(八)

第十四図版 法将寺遺跡遣構出土の大器(九)

第十五図版 法将寺遺跡遺構出土の大器(十)

第十六図版 法将寺遺跡包含層出土の土器(一)

第十七図版 法将寺遺跡包含層出土の土器 (二)

第十八図版 法将寺遺跡包含層出土の土器 (三)

第十九図版 法将寺遺跡包含層出土の土器(四)

第二十図版 法将寺遺跡出土完形土器(一)

第二十一図版 法将寺遺跡出土完形土器(二)

第二十二図版 法将寺遺跡出土の石器(一)

第二十三図版 法将寺遺跡出土の石器(二)

#### 1 遺跡の概要

法将寺遺跡は米沢市万世町梓山字杢代に所在する。遺跡は昭和8年頃に宮坂善助氏によって発見され、後昭和37年に山形県遺跡地名表に登録された。そして昭和50年の分布調査では法将寺裏の畑を中心に70m×80mの遺跡包蔵地として登録されている(山形県遺跡番号 1176)。その他に梓山地区には昭和44年5月に加藤 稔、佐藤庄一氏によって発掘調査を実施なされている杢代遺跡(山形県遺跡番号1175)が東方750mにある。昭和57年~昭和59年にかけて、米沢市教育委員会とまんぎり会は米沢市全域の総合分布調査を実施し、梓山地区で新に16箇所の遺跡を確認している。

法将寺付近を例にとると、No. 278 の法将寺 b 遺跡、No. 293 の法将寺 c 遺跡、No. 297 の法将寺 d 遺跡の 3 遺跡が標高 502.8m の早坂山からのびる舌状先端部から梓川によって形成された河岸段丘上に立置し、法将寺遺跡(a 遺跡とする)がこれまでの遺跡範囲より東南方向に広がることが 判り、約80.000 ㎡の遺跡範囲を有することとなった。

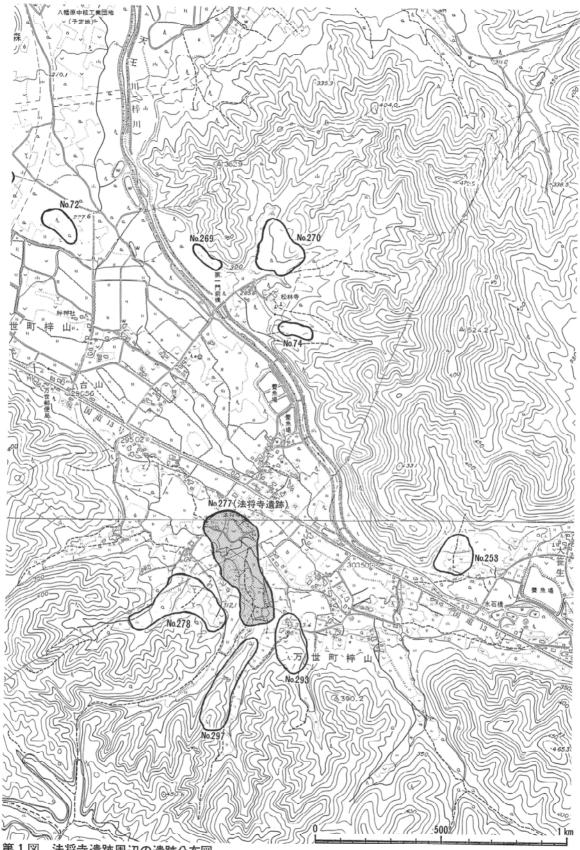
その折,米沢市万世町梓山地内から関根水窪,同小峡地区内に通ずる山形県民有林林道整備事業の林道小峡線が着工する運びとなった。小峡線は3ヶ年の計画で進められて来たものであり、昭和58年度の施工は最終年度に当り、米沢市梓山から水窪ダムにかけての区間内を対象にするものである。林道の万世側に当る梓山にはすでに法将遺跡が存在することが判っており、米沢市教育委員会では工事主体となる米沢市農林課と協議を重ね、昭和58年の7月18日~同年8月18日の約1ヶ月を用して緊急発掘を実施することにした。

#### 2 調査の経過

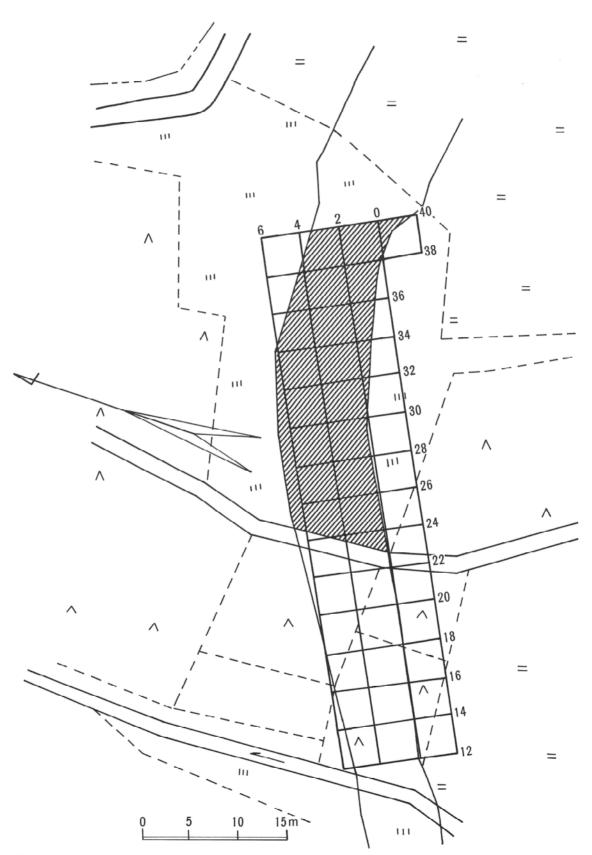
調査に入る前に遺跡の中心部を確認するための事前調査から開始する。平均幅約8 mの道路敷地内の試掘を中心に遺物・遺構の確認を行なった結果,河岸段丘上から山麓にかけての180 mにかけて遺構の集中箇所がみられることから,調査面積を896 m²に設定し,昭和58年7月17日から着工する。

最初に道路幅に沿って4mのグリッドを配し、重機による表上剝離から着手する。調査子定地内は雑木が多いため困難を用したが、立木は残して、抜根作業は人力で進める方法をとり、7月19日まで表土剝離と抜根作業を終了する。7月20日からは遺構集中箇所を中心に面整理、精査を開始した結果、13~40-1~6 Gを中心に多数の遺構が検出されるとともに当初一枚の文化層と判断した下面に2枚の文化層が存在することが判り、順次掘り下げて行くことにし、遺構が最も集中する24~40-1~6 Gを対象に実施する。従って調査の方法は第II層遺構、掘り下げ、同写真撮影、図面作成、記録を7月21日~7月29日、同様に第III遺構面を7月30日~8月9日、第IV層遺構面を8月10日~8月18日の順で進めた。

その結果、第Ⅱ層は繩文中期、第Ⅲ層は繩文前期の遺構群、第Ⅳ層は遺物包含層のため遺構検



第1図 法将寺遺跡周辺の遺跡分布図



第2図 法将寺遺跡,グリッド配図

出は認められなかったものの多量の遺物を検出することが出来た。なお最終精査面積は 306 m²である。

#### 3 検出された遺構〔第3図~第17図, 第1図版~第5図版〕

第Ⅱ層面遺構, 第Ⅲ層面遺構を中心に 136 基の遺構が検出されている。先の第Ⅱ層面遺構は旧河岸段丘(梓川)の直上から舌状先端寄りに分布しているのに対し, 第Ⅲ層面遺構は手前の山麓寄りに分布する特徴がみられた。第Ⅱ層は砂質シルト層, 第Ⅲ層はⅡ層よりもやや明るい黄褐色粘質シルト層でそれぞれその面から掘り込んで遺構を構築している。ここでは第Ⅲ層, 第Ⅱ層の順で各検出された遺構について述べてみる。

1)第Ⅲ層面の遺構〔第3図~第6図,第1図版~第3図版〕

第III層から第V層を掘り込んで検出されたもので $G25\sim31-3\sim7$  Gにかけて 3 棟の竪穴住居が認められた。この 3 棟の竪穴住居跡と HY50に併う KY127の 4 基である。

a 竪穴住居跡〔第3図~第6図〕

すべて隅丸長方形のプランを示す住居跡であり、柱穴は壁下に設する壁柱穴によるものを特徴 として、周溝は存在しない。

HY50 [第3図, 第6図, 第3図版]

G29, 30-6, 7 Gにかけて認められた。北側の一部が道路敷地外であることから正確なプランは不明である。

平面形状―竪穴住居跡の約3分の2が検出されていることから、長方形プランを示す長径3.6m,短径2.3mを有するものとみられる。住居跡の西南に接して存在するKY127は繩文中期に属するもので、住居に併うものではない。

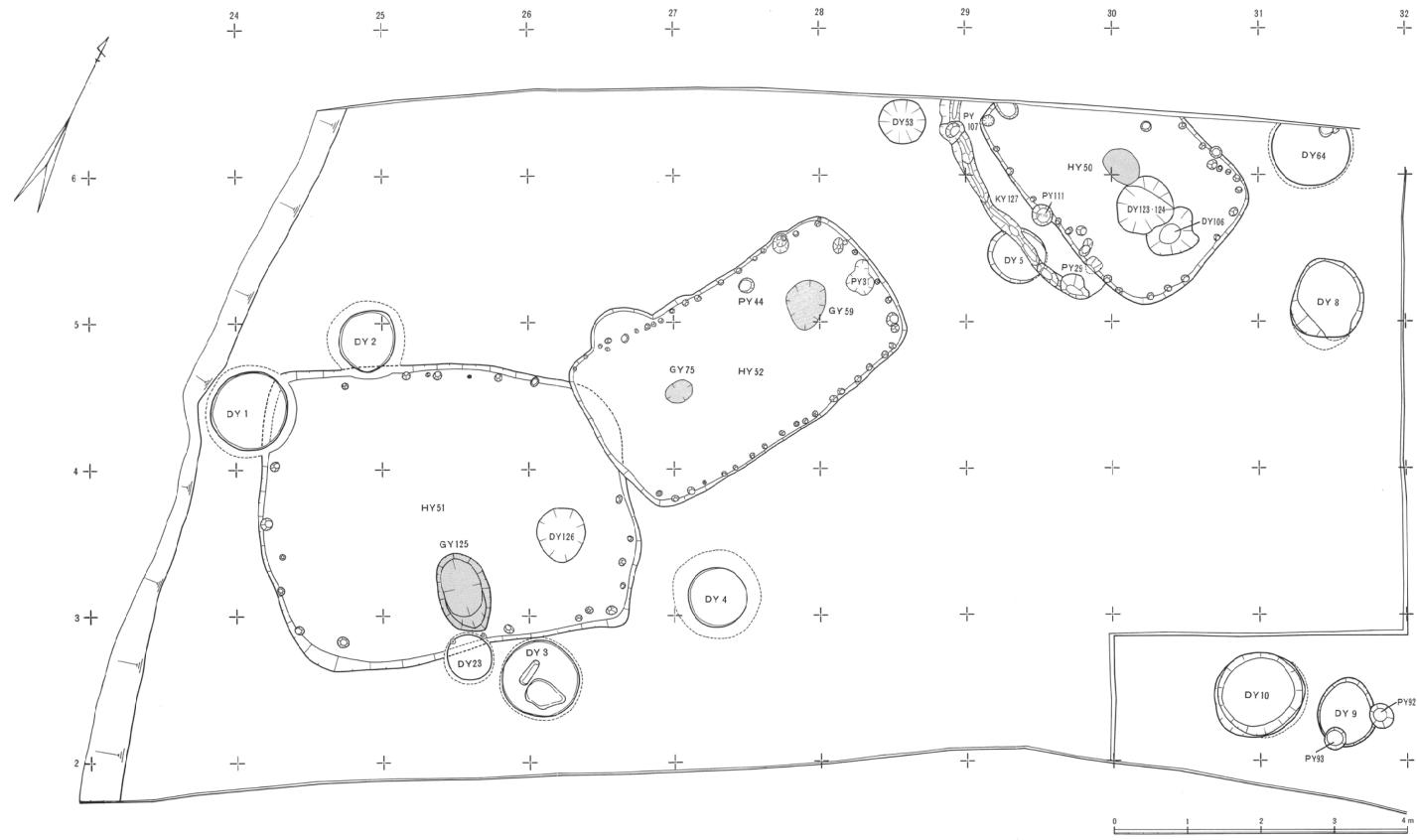
壁 $-70^\circ$ ~80°の角度で斜位に立ち上り、南東コーナー付近で13cmと最も壁を残しており、南で10cm、北壁で7cm、東9cm、西で5cmを測る。

柱穴一壁面から床面に沿って、 $P1 \sim P26$ の26本が10cm $\sim 60$ cmの間隔をもって検出されている 北西コーナ部分が調査区域外になっているので、不明と云わざるを得ないが同様な状況を示すもの と思われる。柱穴の大きさは7cm $\sim 20$ cmで深さ5cm $\sim 32$ cmと小規模である。ただし、PY111とPY62に関しては第II層面から掘り込んでいることから縄文中期と考えられる。

炉跡―住居跡の中央に55cm×40cmの楕円形の地床炉として認められた。後述するHY51, HY52の様に掘り込んではいなく、3 cm位の高まりを呈していた。

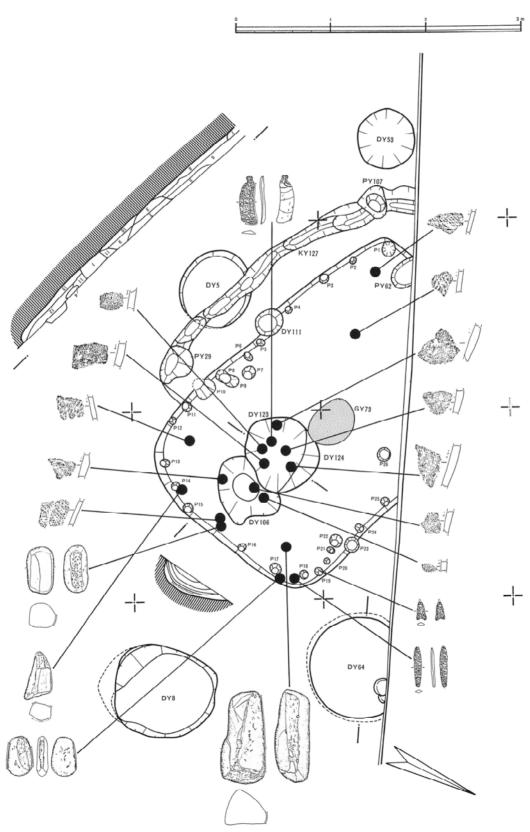
土壙—DY123, DY124, DY106 の3期が床面に切り合い関係を示しながら認められた。内部からは石匙1点とともに撚糸文を主体とした土器片26点が検出され,木炭・焼土が大量に含まれていた。住居跡に付随する遺構(炉跡に関連する)と考えたい。

出土遺物--撚糸文を中心にした土器片32点と礫器4点,石匙1点,北東壁から小形の石槍(尖



第3図 法将寺遺跡遺構全体図(1)

- 6 -



第4回 法将寺HY50平面図

頭器) 1 点,P19から石鏃 1 点それに西壁寄りに 0.3cm~ 3 cm位の剝片 200 点が検出されている。時期決定一繊維を多量に含むRの撚糸文,ループ文,L  $\left\{\begin{smallmatrix} R\\R \end{smallmatrix}\right\}$  の前々段 4 本多条繩文から繩文前期頭に位置付けられる。

HY51 [第3回, 第5回, 第1回版, 第2回版]

G25~27—3~5 Gの範囲より検出した。北東コーナーの一部をHY52によって切られ、同じ様に北西コーナ、北壁、南壁も中期の土壙DY1、DY2、DY23に切られているが、平面プランは明瞭に確認される。

平面形状—正方形に近い隅丸方形プランを呈し、長径5.2 m、短径4.1 mを有する。西壁辺に 比べ東壁が短く、両端が外に僅かに張り出す特質がある。

壁―北壁から東壁にかけては直角に近く立ち上るのに対し,南壁と西壁は比較的ゆるやかに立ち上る。地形全体が南西から北東にかけてゆるやかに傾斜していることもあって,南壁から西壁は10cm~27cmと深く,北側から東壁は12cm~13cmと浅くなっている。

柱穴一壁下に沿って $P1\sim P24$ の24基が認められた。径 5 cm $\sim 15$ cm,深さ10cm $\sim 18$ cmと平均的に配されている。柱穴間は北側と西側が30cm $\sim 50$ cm位であるものの,東から南,ことに南側に面した柱穴間は $15\sim 175$  cmと不規則である。おそらくP23とP24の間に入口が設していたものとみられる。

炉跡―南壁に接して認められた。長径 115 cm, 短径70cmの楕円形を呈する底面には木炭と焼土 片が混在して検出された。我々は炉跡と断定しているが, 先のHY50や後述するHY52の様に炉 床が赤褐色に変化する焼性痕が認められないことから土壙的要素を有するのかも知れない。

土壌―南北寄に70cm×66cmの円形状落ち込みがみられる。深さ5cmと浅く,遺物も検出されなかった。床面から掘り込んだものであり、住居跡に併う施設と考えたい。

出土遺物一床面に貼り付く様に19点の土器片と石匙1点, 剝片23点が, 東壁からPY26付近と 西壁寄りに検出されている。土器片はすべて少破片であり, ことに東壁付近からは同一個体の破 片が廃棄されたごとく出土している。

年代決定一ループ文、「ハ」状文等からみて繩文前期初頭の川上名Ⅱ式、室浜式位に平行するものと思われる。

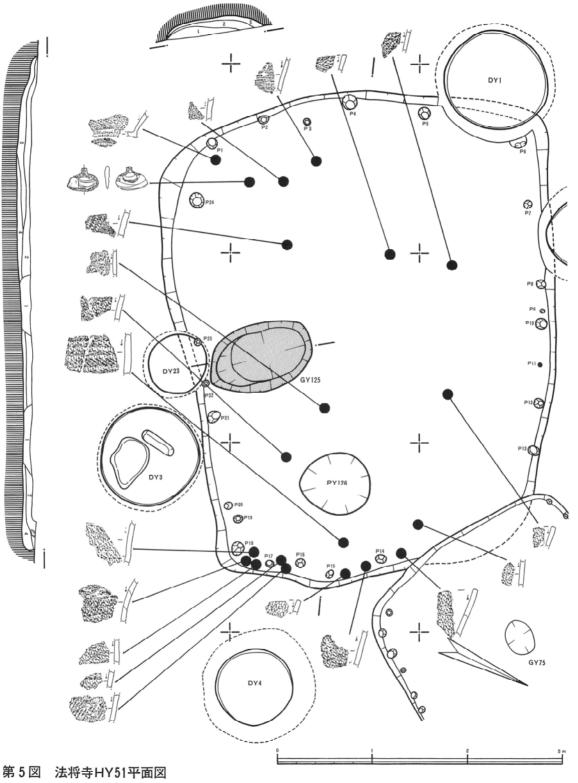
HY52 [第3図, 第6図, 第1図版, 第2図版]

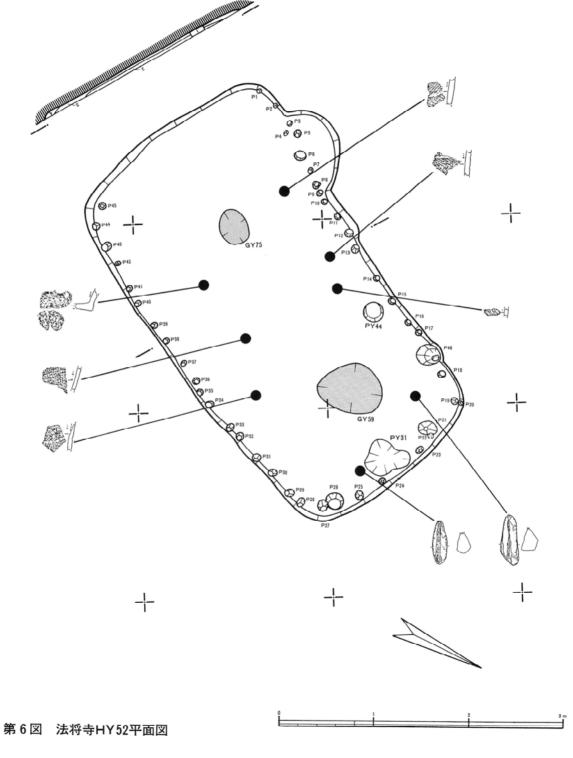
 $G26\sim29-4\sim6$  Gにかけて検出された。HY51を切って構築したものである。

平面形状―南北に細長い長径4.97 m, 短径2.45 mの隅丸長方形プランを呈し, 西壁の一部が不自然に半円形状の張り出しをもっている。

壁一全体的に浅く、平均4cmをなすがプランは明瞭に認められた。

柱穴-南壁を除く壁下に10cm~30cmの短い間でP1~46の46基が検出,今回検出された住居跡





の中では最も多い。柱穴の大きさは3cm~10cm,深さ6cmを有し、壁面にくい込む様に配列されている。

炉跡―南と北寄り中央に2基の地床炉が存在する。南に位置するGY75は40cm×30cm, 深さ3 cmの楕円形を呈し、北側のGY59は長径70cm, 短径55cm, 深さ7 cmの僅かな凹を有する不整楕円形炉であり、両者とも赤褐色に焼けた痕跡を示していた。

出土遺物-土器片6点と礫器2点の計8点が床面から認められた。

時期決定一結節羽状繩文,突刷文等の特徴,それにHY51よりも新しい時期に構築したことから考え,大木1式に新しい年代が与えられる。

2)第Ⅱ層面の遺構〔第7図~第17図, 第3図版~第5図版〕

今回調査した範囲でみると、 $G24\sim26-1\sim6$  G付近の土壙群、 $G29\sim37-1\sim6$  G付近の土壙群、HY49、BY136 の住居と土壙群の集中する $G38\sim40-1\sim6$  Gの三ヶ所に分けられる。第II層面の遺構群は縄文中期中葉の大木8 a,8 b式に求められるもので、僅かに同末期に類するものも含まれるが、今回検出された遺構等の関連を示すものではない。

a 竪穴住居跡〔第7図,第6図,第4図版〕

 $G38 \cdot 39 - 4 \sim 6$  にかけて確認されたものであり、道路敷地内に約半分位が加わることから西側を拡張して調査したものである。

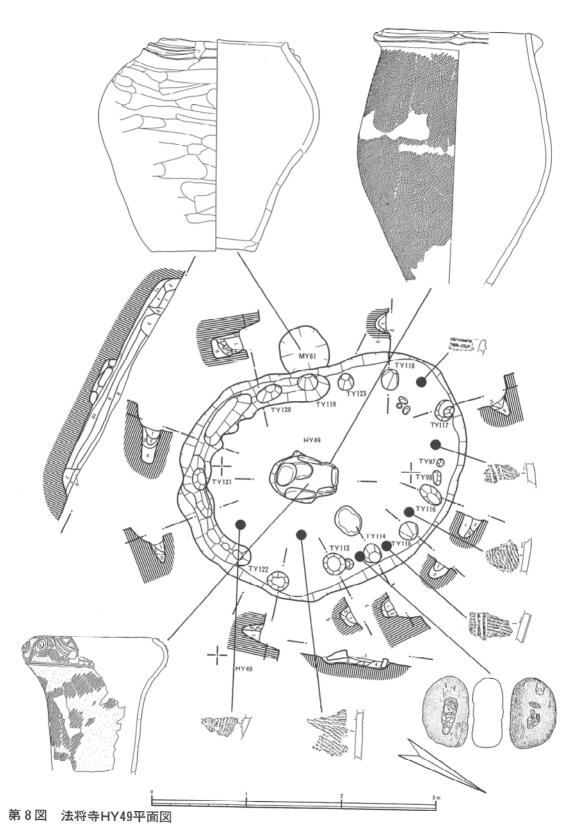
平面プラン―東西に長い楕円形を呈し、西側の一端を埋設土器(MY61)が切っている。全体的にみると東側が広く、西側が若干窄まる特徴がある。

壁―東から北壁にかけて65°~80°の斜位に立ち上るが南から西側にかけてほぼ直角に立ち上って北壁で20cm, 南で25cm, 東25cm, 西22cmと平均的な深さを有するが, 地形的に南西から北東にゆるやかに傾斜していることもあって, 西壁と南壁が特に深く意図している。

柱穴- T Y 113  $\sim$  T Y 123 の11本を主柱として、一部西壁に T Y 97、 T Y 98の小柱穴を複柱に 用いている。柱穴の形状は円形ないし楕円形プランをなし、径20cm $\sim$ 25cm、深さ13cm $\sim$ 25cmを 削り柱穴内の埋土は 2  $\sim$  5 でNo.1 の様な柱痕跡を示すものも多く観察された。

同溝―20cm~30cmの幅をもって、東壁から西壁にかけて認められる。TY 119~TY 121 の 3 本が周溝内部に配されているが、周溝の平均は17cm~28cmと北壁下に位置する柱穴に比べ、やや深い。傾斜面からすると、東西壁下の周溝配置は排水効果を十分に考慮して構築したものと考えられる。

炉跡—床面のほぼ中央からやや東寄りに位置する。偏平な河原石を6個と深鉢形土器を組み合せて構成するもので、床には深鉢形土器の半部位を切断して炉床に利用している。炉を構築するために掘り込だ掘り方は南北52cm、東西75cmの楕円形であり、壁に沿って礫を配している。炉の深さは5cm、掘り方底面は7cmをなす。



- 14 -

床面―平担で北東部が南西側に比べ若干固い様であった。

出土遺物―炉跡(IY94)の床面に使用された2点の深鉢形土器第19図1・2の他,四石1点 と土器破片6点が住居床面から検出されている。第19図1の特徴からすると,粘土貼付文+沈線 文による渦巻文の特徴から大木8b式でも古い時期に属するものとみられる。

b掘立建物跡〔第7回, 第9回, 第3回版〕

G38・39—1~4 Gにかけて、多数の土壙とともに検出されたものである。当初土壙の一部と 考え、DY記号を用いたが、覆土の状況や遺構の構造から掘立建物跡と考えPYの記号を用いた 2 者がある。ここではすでに遺構登録を行なったこともあって、併用して使用する。

平面プラン—DY112 を中心に楕円形に配してある。北端となるDY22, PY113 を平行させてから、同様にPY66、PY46とPY128、DY58がほぼ対面する。そして北端に存する柱穴の中心と各平行する柱穴を結ぶ様に南端にDY112 を置いている。

柱穴—主軸方向に長い楕円形プランを有するもので、長径50cmのPY128 から70cmのDY128と不規則である。深さは35cm~58cmと深く、DY112、DY128、DY58、PY113 の掘り方北端に柱痕跡を確認することが出来た。柱の痕跡は15cm~21cmである。主軸長は5 m、最大幅2.7 mを有する。

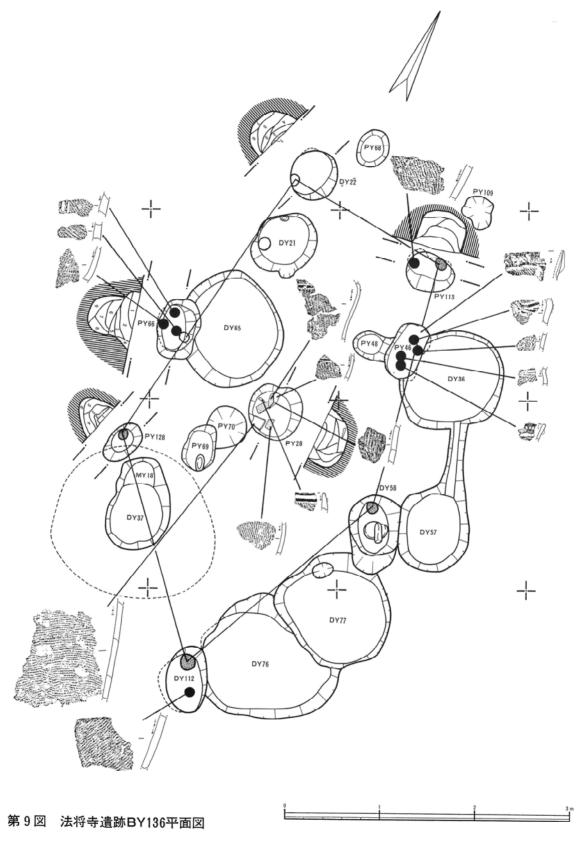
炉跡—DY22, PY113 とPY112 を結んだ中軸線の中央に55cm×56cm, 深さ32cmの炉がある炉は土壙状を呈し, 底面から内壁にかけて赤褐色に焼けた痕跡を示し, 内部には二次焼成をうけた土器とともに多量の木炭, 焼土が推積していた。

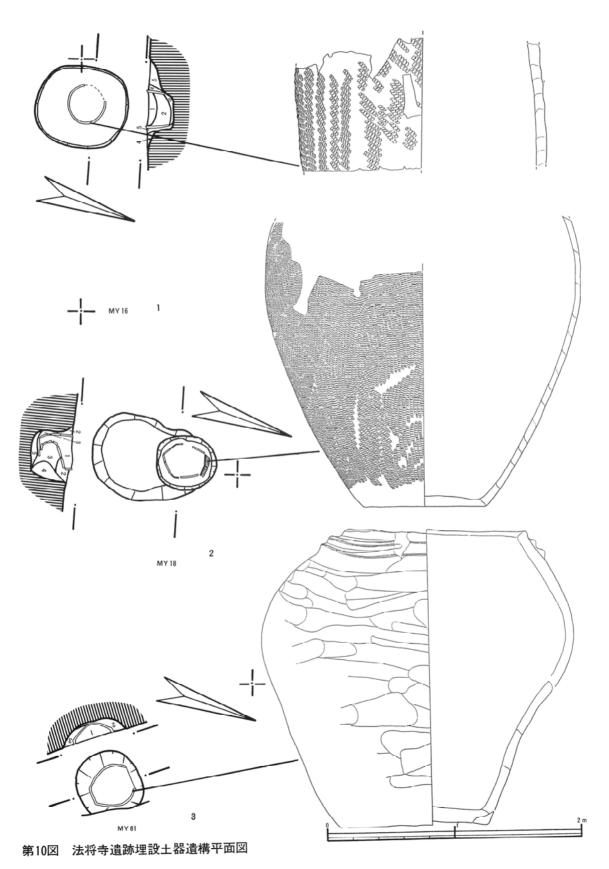
出土遺物—DY66, DY112, DY46, PY113とPY28の炉跡内から数片の土器片と石器剝片が検出されている。PY28の炉跡を除くと何れも小破片であり、DY66, PY46の様に柱抜取り後に推積したと考られる柱穴に多くみられる。年代的にはDY46出土の多くは大木8 a 式, DY66が大木8 b 式と年代決定を行うまでの資料にはならない。

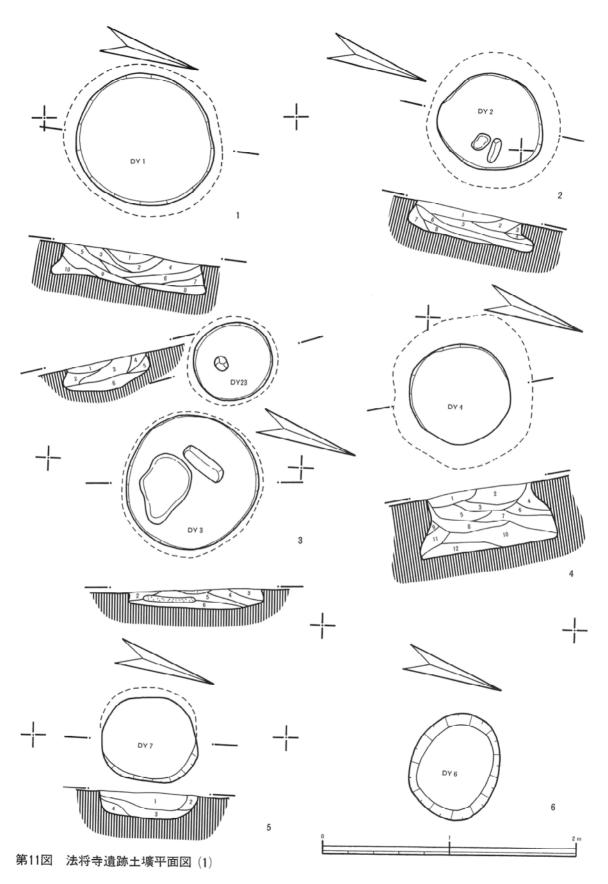
切り合い関係一DY112 とDY76, DY58とDY77, DY57, DY46とPY36, PY48, PY66とDY65の4基が土壙, 小ピットに切り合い関係を示している。この中でDY112 はDY76を切って, DY76をDY77が切って, DY58はDY57を切り, PY46はPY36をPY36をPY66はDY65を切っていることが判った。土壙の多くは自然推積層を有しているものが大半で, 年代を決定するまでは至っていないが, DY76からは第29図の完形土器が検出され, 大木8aでも比較的新しい年代が与えられ, DY77は大木8b式でも古い年代と考えることが可能である。従ってBY140 の年代は, 大木8a式の新しい時期から大木8b式の古い時代と求めることが出来,おそらく先のHY49と同時期と推測するのが正しいものとみたい。

c土壙〔第3図, 第7図, 第11図~第17図, 第5図版〕

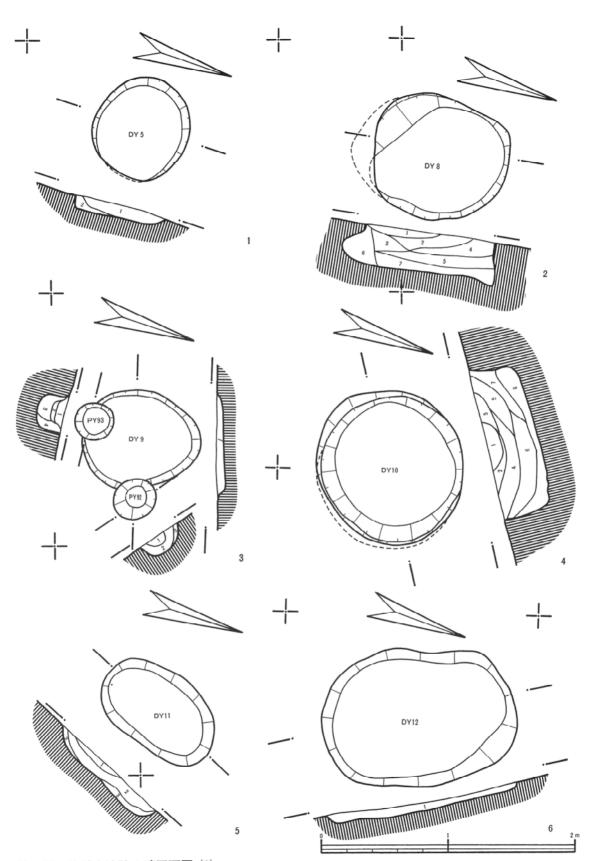
今回検出され土壙が分布状況より、3ヶ所のかたまりで分布することは先述した通りである。



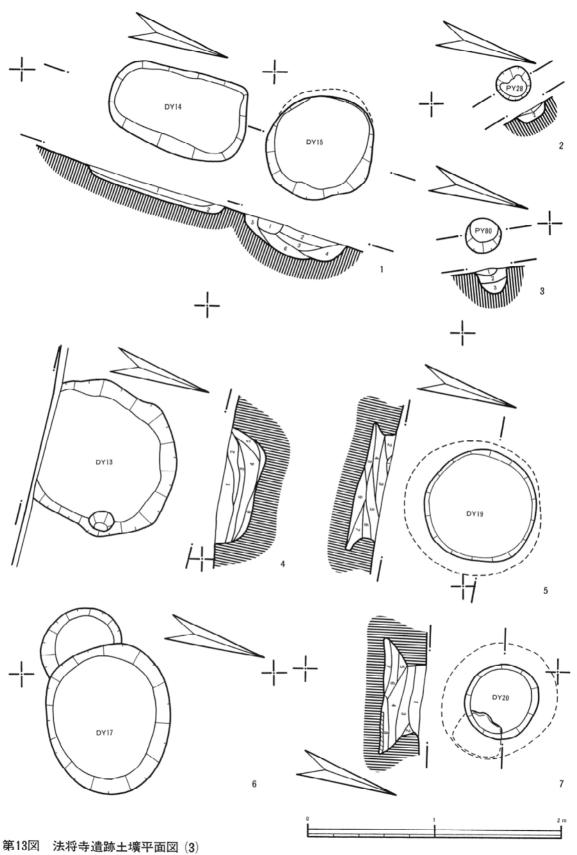


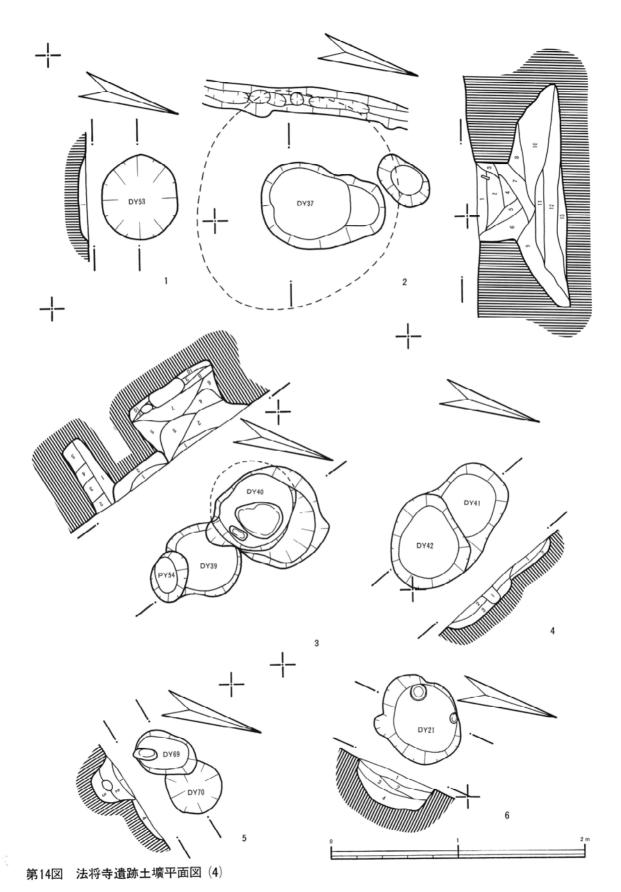


- 18 -

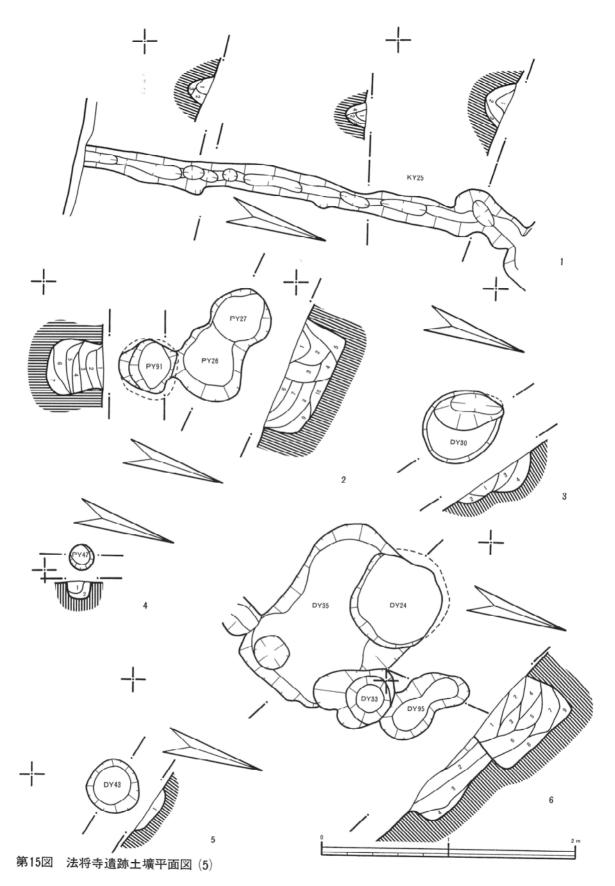


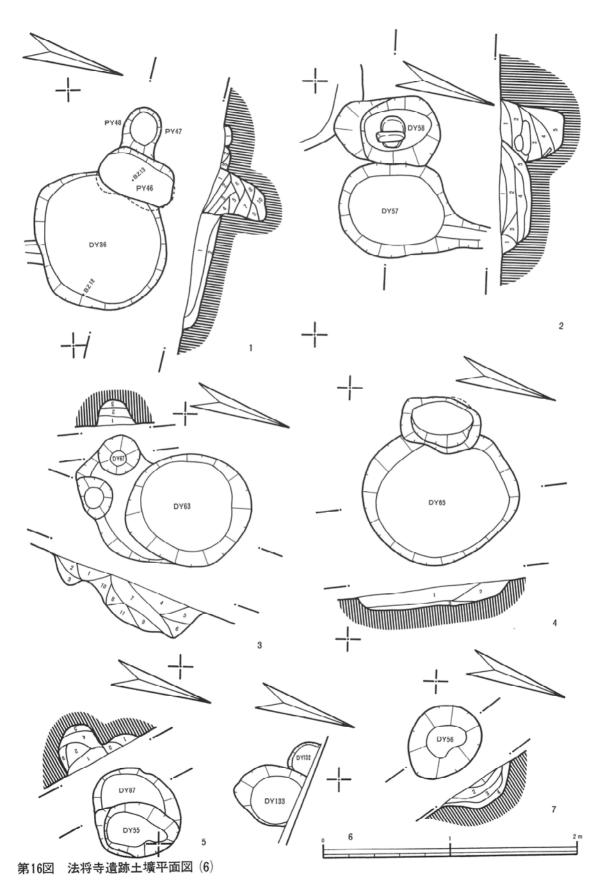
第12図 法将寺遺跡土壙平面図(2)

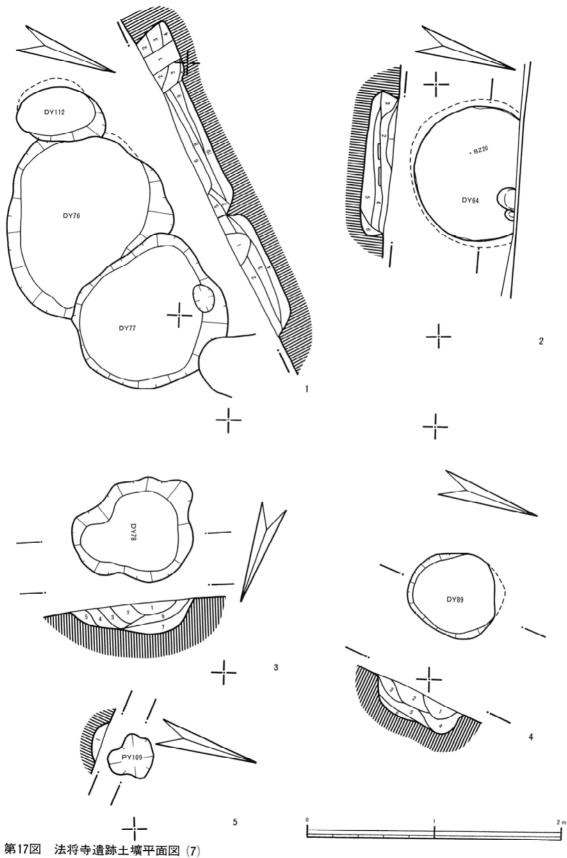




- 21 -







今回検出された土壙は58基で、形状、埋土の吟味から次の3グループに大別する。

第1のグループ(自然推積 a)

深状の袋状を示すものであり、遺物は殆んど含まれず埋土は自然推積状況を有する。 DY1, DY2, DY4, DY10, DY15, DY37の6基が含まれる。

第2のグループ(自然推積b)

土壙底面がボール状を有するものであり、DY13や、DY76の様に遺物が多く出土するのもある。先の第1のグループは、河岸段丘よりやや離れた場所を選定しているのに対し、第2のグループは段丘直上付近に多く分布する傾向がみられる。DY6、DY13、DY34、DY63、DY65 DY77、DY78、DY89の8基が検出され、埋土はすべて自然推積土層に分類される。

第3のグループ(自然推積c)

平面形態が円形,長方形,楕円形とさまざまであるが,全体的に7~20cm前後と浅く,遺物の含まれている割合が少ない。底面はボール状や,平担なものが多く,比較的直角に立ち上がるものが大半である。DY5,DY9,DY30,DY17,DY14,DY12,DY21,DY23,DY53DY33,DY36,DY39,DY41,DY42,DY43,DY81,DY87,DY125,DY88,DY123DY124の21基があり、すべて自然推積を示す。

第4のグループ(人工推積 a)

袋状を呈し, 浅く内部に人頭大の円礫を設するグループで, 人工的推積を示す。 D Y 3, D Y 20, D Y 40, D Y 64の 4 基がある。

第5のグループ(人工推積b)

先の第1のグループに類する。袋状を有し、比較的深く人工的推積を示すもの。 DY7, DY8, DY19, DY76の4基がある。遺物はDY7の第20図3やDY76の第20図1の様に遺物が底面に沿って認められた。

第6のグループ(人工推積c)

ゆるやかなボール状や底面が平担で直角的に立ち上り、且つ人工的推積状況を示す土壌を一括した。この中には底面から異形の石匙を検出したDY11や玉1点を検出したDY55らが含まれているが、遺物の出土は少ない。DY35、DY56、DY57、DY11、DY55、DY98、DY99、DY105、DY114、DY128 の10基が含まれる。

以上の4グループに分けたが、第II層の土質が一部シルト質を有していることで、第2のグループや第6グループの中には袋状形態が崩れてボール状や皿状を示していることも十分考慮される。

d 土器埋設遺構〔第3図,第7図,第10図〕

縄文中期中葉期に位置するものでMY16, MY18, MY61の3基がある。初めのMY16はHY

52上面を掘り込んで存在するものであり、深鉢形土器の口縁部と底部を切断して胴部のみを74cm ×68cm、深さ22cmの円形竪穴に設置するものであるが、木炭、焼土が認められないことから炉跡 に併うものではない。次のMY18はDY37を切った長径50cm、短径44cm、深さ33cm内に深鉢形土 器の口縁部を切断し、直立した状況で認められた。最後のMY61はHY49に切られていることよ り、住居跡が構築された前に設置されたものであり、甕形に近い深鉢形土器の半位を縦に切断し て60cm×50cm, 深さ12cmの円形土壙に埋設したものである。

#### e その他の遺構〔第3図, 第7図, 第6図, 第15図〕

PY記号で示した竪穴住居跡以外の柱穴状遺構及び不明の小ピットを有するものと KY記号で 示した溝状遺構の両者が含まれる。

前者のPYは明らかに柱穴を呈したと推測されるPY92、PY93、PY27、PY26、PY54、 PY32. PY60. PY91他と浅く性格不明なPY70. PY109. PY103. PY104 他がある。

後者の溝状遺構はKY25、KY127 の2基があり、KY25は17cm~27cm、深さ20cm~30cmを測 り. DY34から南方向に3.5 m確認された。KY127 はHY52の南側に30cm程離れて平行して検 出された溝状遺構であり、「~」状に配してあった。幅15cm~22cm, 深さ19cm~22cmを有し、 周溝 を切ってPY107 とPY129 の2基の柱穴状ピットが存在する。

以上が今回検出された遺構の概要であるが、詳細は次の第1表法将遺跡遺構計測分類表を参照 願いたい。

造構No

D Y 17

M Y 18

D Y 19

D Y 20

D Y 21

D Y 22

D Y 23

D Y 24

K Y 25

P Y 26

P Y 27

P V 28

P Y 29

D Y 30

P Y 31

P Y 32

長径

120

58

(95)

73

52

(56)

(72)

72

(350)

55

50

56

45

48

61

52

40 27

55

30 23

55 25

40 12

40 27

短径

97 17

深さ

層位

10枚 A

8 枚 A

6 \* B

12枚 A

2 枚 A

4 枚 A

4 枚 B

7 枚 B

1 枚 A

8 \* A

3 枚 B

1 \* A

6 枚 A

2 枚 A

6 枚 A

2 校 B

第1表法将寺遺跡遺構計測分類表

平面形

**#**4

四 29

Щ

円 48

楕円形

椿 円 形

不整楕円形

椿田形

梅 田

椿田形

椿 円 形

長方形

联络

遺

趣器2占

土器片4点

土器片4点

剝片 2点

土器片1点

土器片 8 占

石上1点

ナシ

埋設土器1点

1点、礫器2点

土器片 3点, 剥片 3点

土器片 2点、剝片 3点

石錐1点、土器7点

打製石斧 1点, 石核 1点

礫器1点, 土器片1点

礫器 1点、土器片28点

物

深さ

25

15 円 形

14

23

48

15

10

29

15

資機No

D Y 1

D Y 2

D Y 3

DY 4

DY 5

D Y 6\*

DY7

DY8

DY9

DY10

D Y 11

D Y 12

D Y 13

D Y 14

DY15

MY16

長径

110

(125)

85

(107)

106

(115)

80

(120)

(80)

84

77

105

95

125

(130)

100

153

110

90

短径

102

(123)

(105)

103

(113)

80

74 13 Щ 形

70

(72)

95 34

75

115

(123)

62

107

113

64

80 22 円

(87)

(118)

45 埋設土器1点 28 Щ 形 5 枚 B Щ **#**3 土器片20百 9 枚 B (106)46 Щ 形 ナ 3 8 枚 B (84) 60 楕円形 29 土器片7点 4 枚 A ナシ 48 30 Щ 形 7 枚 B 20 形 剝片石器1点 6 枚 A (70) 49 不整円形 十器片 2 占 9 \* A 17~27 20~30 十器片2占 3 枚 A 37 不整楕円形 土器片16点 5 枚 A

土器片6点

土器片 8点

土器片1点

土器片 5点, 礫器 2点

土器片10点、礫器1点

+ 3

潰

十器片23占

B 人工推積

層位

3 枚 A

5 枚 A

8 枚 A

4 枚 A

8 枚 A

枚 B

自然推積

平面形

楕円形

形

形

不整椿田形

不整楕円形

不整楕円形

楕円形

Щ 32

遺構No	長径	短径	深さ	平面形	遺 物	層位	遺構No.	長径	短径	深さ	平面形	遺	物	層位
D Y 33	65	45	50	不整楕円形	土器 2 点, 剥片 2 点	3 枚 A	P Y 85	30	27	15	円 形	ナシ		5枚
D Y 34	?	?	29	不整楕円形	土器片 1 点	1 枚 A	P Y 86	?	48	29	円 形	土器片1点		2枚
D Y 35	110	?	32	不整円形	土器 1 点	4 枚 B	D Y 87	?	64	14	円 形	ナシ		9枚
D Y 36	120	100	13	円形	石鏃1点,剝片3点	2 枚 A	D Y 88	63	55	22	円 形	ナシ		6枚
D Y 37	70 (160)	67 (172)	71	楕円 形	土器片7点 礫器2点,土器片7点	13枚 A	D Y 89	70 ( 79)	68	28	不整円形	土器片1点		
D Y 38	67	53	21	円 形	ナシ	2 枚 A	P Y 90	20	15	28	楕円形	ナシ		7枚
D Y 39	?	60	9	円形	土器片 5 点	2 枚 A	P Y 91	45	42	44	不整円形	ナシ		3枚
D Y 40	75 ( 80)	57 ( 72)	52	不整楕円形	剝片石器 1 点, 土器片 6 点	10枚B	P Y 92	35	32	16	円形	ナシ		4 枚
D Y 41	?	53	10	楕円形	土器片 1 点	2 枚 A	P Y 93	30	27	21	円 形	ナシ		
D Y 42	76	63	15	不整楕円形	ナシ	3 枚 A	I Y 94	72	51	8	楕円形	ナシ		
D Y 43	33	31	10	円 形	土器片 4 点	1 枚 A	P Y 95	?	27	29	楕円形	ナシ		5枚
P Y 44	22	21	13	円 形	ナシ		P Y 96	22	222	26	円 形	ナシ		
P Y 45	56	47	9	楕円形	ナシ		T Y 97	9	7	5	楕円形	ナシ		
P Y 46	60	35	46	楕円形	石七1点, 土器片2点	10枚B	T Y 98	16	8	11	楕円形	ナシ		4枚
P Y 47	20	18	14	円 形	土器片1点	2枚B	D Y 99	50	47	13	円 形	ナシ		2枚
				楕円形	ナシ	3 枚 A	P Y 100	23	27	17	楕円形	ナシ		"
P Y 48	35	28	15				T Y 101	(30)	11	7	楕円形	+ >		
H Y 49	312	227	20~25	不整楕円形	完形土器 2 点, 土器片 6 点, 礫器 1 点	枚 A		18	18	11	円形	, , , , , ,		
H Y 50	362	228	5~13	隅丸長方形	石鏃1点,失頭器1点, 礫器4点,土器片32点, 石ヒ1点,チップ221点	枚A	T Y 102	10	10	11	n /12	, ,		
H Y 51	515	412	10~18	隅丸方形	石ヒ1点,土器片32点, 剝片15点	5 枚 A	P Y 103	?	12	12	楕円形	ナシ		5 枚
H Y 52	497	245	2 ~ 5	隅丸長方形	礫器 2 点, 剝片 7 点, 土器片 6 点	3 枚 A	P Y 104	28	27	27	不整楕円形	ナシ		9 杉
D Y 53	63	50	7	円 形	土器片7点	1 枚 A	D Y 105	?		15	楕円形	ナシ		
P Y 54	41	32	55	楕円形	ナシ	5 枚 B	D Y 106	75		22	不整楕円形	上器片 2 点		
D Y 55	65	45	32	不整楕円形	ナシ	5 枚 B	P Y 107	35	33	38	不整円形	土器片1点		
D Y 56	65	53	23	楕円形	石錐1点, 土器片3点	4 枚 B	P Y 108	?	22	13	円 形	ナ シ		1 杉
D Y 57	92	74	25	楕円形	土器片 5 点	5 枚 B	P Y 109	30	25	10	不整円形	ナシ		
D Y 58	85	53	51	楕円形	碟器1点, 土器片9点	5 枚 B	P Y 110	30	29	7~34	円 形	ナシ		
G Y 59	70	55	7	不整楕円形	ナシ		D Y 111	80	?	18	円 形	ナシ		
P Y 60	50	35	27	楕円形	ナシ	4 枚 A	D Y 112	71	(52)	35	楕円形	土器片1点		4 杉
M Y 61	?	50	11	円 形	埋設土器片点, 土器片 8点	2枚B	P Y 113	52	41	50	楕円形	土器片1点		3 枚
P Y 62	?	25	10	楕円形	石製品1点, 土器片1点	2 枚 A	D Y 114	?	37	18	楕円形	ナシ		3 杉
D Y 63	103	87	38	楕円形	礫器1点, 土器片1点	11枚 A	T Y 115	20	18	30	楕円形	ナシ		2 杉
D Y 64	105 (115)	100 (105)	23	円 形	スクレーバ2点, 礫器 1点, 土器片27点	5 枚 B	T Y 116	26	16	21	不整楕円形	ナシ		3 杉
D Y 65	117	107	15	楕円形	ナシ	3 枚 A	T Y 117	22	20	15	不整楕円形	ナシ		3 村
D Y 66	62	42	58	不整長方形	土器片 5 点	9枚B	T Y 118	22	19	37	楕円形	ナシ		3 M
P Y 67	32	26	26	円 形	ナシ	3 枚 A	T Y 119	21	?	33	楕円形	ナシ		
P Y 68	42	32	10	楕円形	ナシ	2枚A	T Y 120	28	?	31	不整楕円形	ナシ		6 村
P Y 69	50	33	30	楕円形	碟器1点, 土器片2点	3 枚 A	T Y 121	25	18	45	不整楕円形	ナシ		
P Y 70	?	42	7	円 形	ナシ	1 枚 A	T Y 122	22	20	23	円 形	ナシ		3 村
P Y 71	30	25	31	円 形	ナシ	2 枚 B	D Y 123	80	62	8	不整楕円形	ナシ		5 杉
P Y 72	25	17	10	楕円形	ナシ	3 枚 A	D Y 124	76	?	6	不整円形	ナシ		1 1
G Y 73	55	40	+ 3	楕円形	ナシ	4 枚 A	G Y 125	115	70	13	楕円形	礫器1点		3 1
P Y 74	26	22	19	楕円形	ナシ		D Y 126	77	66	5	不整円形	ナシ		
G Y 75	40	30	3	楕円形	ナシ		K Y 127	340	15~25	19~22		土器片6点		
D Y 76	148	130	27	不整楕円形	礫器 1 点,土器片10点 完形土器 1 点,土器片20点	6 枚 B	D Y 128	49	30	58	楕円形	ナシ		6 松
D Y 77	125	117	21	不整円形	礫器 2 点,土器片 5 点	4 枚 A	P Y 129	27	25	50	円 形	ナシ		3 村
D Y 78	105	82	24	不整楕円形	土器片1点	7 枚 A	P Y 130	20	17	10	楕円形	ナシ		
P Y 79	24	16	28	楕 円 形	ナシ		P Y 131	(34)	32	16	円 形	ナシ		3 ħ
P Y 80	27	26	11	不整円形	ナシ	2 枚 A	P Y 132	?	?	22	円 形	ナシ		
D Y 81	?	62	11	円 形	ナシ	3 枚 A	D Y 133	?	50	41	楕円形	土器片1点		
P Y 82	30	27	19	円 形	土器片1点	3 枚 A	P Y 134	26	25	28	円 形	ナシ		
P Y 83	20	16	13	楕円形	ナシ	2 枚 A	T Y 135	24	23	23	円 形	ナシ		
P Y 84	23	22	11	円 形	ナシ		B Y 136					ナシ		

## 4 出土遺物〔第18図~第36図,第6図版~第23図版〕

第Ⅱ層面遺構,第Ⅲ層面遺構と第Ⅳ層の包含層を中心に石器 317点,土器1510点の計1827点が

今回の調査で検出された。ここでは石器と土器に大別し、述べてみる。

1) 土器 [第18図~第32図, 第6図版~第21図版]

遺構,包含層出土土器群1510点の中には土壙内,埋設土器,住居内出土土器を含め10点の復元 完形土器がある。本項ではこれらの土器類を一括し,時期別に大別することによって,繩文時代早期(A群土器),繩文時代前期(B群土器),繩文時代中期(C群土器)の三グループに分けられる。さらに単位文や文様表出技法,器形等の吟味から幾つかの細分が可能であり,以下に細別した順で述べてみよう。

a A群土器〔第30図, 第31図, 第16図版~第18図版, 第20図版 1〕

 $G27\sim32-1\sim7$  Gの限られた範囲からの検出で、第V層(暗黄茶褐色粘質土層)から認められた 368 点である。粘質土層に含まれていることもあって、文様の判別できる資料は 121 点であった。文様構成手法から次の10類に分けた。

A群 I 類〔第30図 1~12〕

先端の鋭利な工具で施文する細状の沈線文と円形及び半円形状の突刷文の組み合せ間に貝殼腹縁圧痕文を横走したもの。この仲間には沈線を平行するものと斜位に施する二通りがある。器形は口唇部が尖り、僅かに内曲気味に外反するものとみられる。田戸上層式、常世式に併行する。

A群II類〔第30図13~27, 32, 33〕

半截竹管による平行沈線文,斜行沈線文,横位の鋸歯状文,斜位の鋸歯状文,縦位の鋸歯状文とややゆるやかな波状文,それに一条の沈線文による横位,斜位,縦位の鋸歯状,波状沈線を主要単位文として口唇部や間内に横走する貝殼腹縁連続文を組み合せたグループをまとめた。関東の田戸上層式,福島県を中心として分布する常世式に併行する。器形は、内曲気味に外反する口縁が頸部で窄まる、桑山No.4遺跡の完形土器(明神裏III式)に近いものと考えられる。

A群Ⅲ類〔第30図28~31, 34~41〕

一条や二条の平行沈線文を区画文として、多条斜行沈線、格子目状文を配する仲間で、田戸上 層式に併行するグループとみられる。

A群Ⅳ類〔第30図42~66〕

貝殼腹縁連続文を中心に施文するグループを一括した。口縁部を主体に横位、斜位の組み合せによるものであり、大寺、常世期に求めることができる。器形は外反するものが多く、頸部で段を有する第29図51もある。

A群V類〔第30図67~82, 第31図39〕

半円状や円形状,それに方角状の突刷文を列点状に配するグループで、明神裏Ⅲ式にみられる 突刷沈線文から発展したものと考えられる。器形は平縁と大きく波状を呈する二通りがあり、両 者とも外反する。

## A群Ⅵ類〔第31図1~8〕

口縁部が尖状に大きく波状するのが特徴で、口唇部と頸部を中心に施文される貝殼腹縁圧痕文が縦位、横位、斜位の組み合せで配されている。この仲間には第30図1で示されている様な貼付を有するものも含まれる。全体的に口縁部が肉厚で頸部を薄くすることによって頸部との境を区画している。器形は口縁部が外反し、頸部で若干窄まり、そのまま底部に斜行するものと考えられる。常世式に併行する。

## A群₩I類〔第31図9~19〕

繩先端を突刷して列点状に横走するグループで、一見円形状の突刷文に見る。この手法は法将 寺遺跡で初めて発見されたものであり、創草期以外での使用を示すものとして注目される。第30 図 9~12 は絡条体の先端部での圧痕、第31 図 13~19 は R  $\left\{\begin{smallmatrix}\ell\\\ell\\\ell\end{smallmatrix}\right\}$  もしくは太状の絡状体先端での突刷 文で、前者は鋸歯状沈線文、後者は横位の連続短沈線文、貝殼腹縁圧痕文を加えている。器形は 尖状を示めす波状口縁と平縁を有する二者があり、内曲気味に外反した口縁部が頸部でくびれな がら胴部でゆるやかに曲し、底部に傾下するものとみられる。常世式に併行するとみられる。

## A群₩Ⅲ類〔第31図20~25〕

絡条体圧痕を主体にしたグループで、6点出土している。器形はA群Ⅵ類に近いものであり、 大きく波状をもつものと平縁を有するものが含まれる様である。絡条体圧痕文とともに半截竹管 によるゆるやかな鋸歯文や半円形突刷文が施文する。関東地方から東北南半に分布する子母口式 に併行するものと考えられる。

## A群IX類〔第31図26~28〕

胴部片である。半截した竹管を用いて縦位に連続施文するもので、A群V類やA群以類の胴部に用いられるものとみられる。

## A群X類〔第31図29~38〕

無文の土器群を一括した。第31図30~35は胴部片で、A群I類~同¶類の胴部と考えられる。29は口唇部が丸味を有する口縁部片であるが、この様に全面を無文で統一するものは多くみられない。36~38は尖底部片である。36・38は第31図—39の様な砲弾形を有する底部と推測されるが37は角度が大きく、胴部が広がって口縁部も急速に外反する器形とみられる。

#### b B 群土器

HY50~HY52の竪穴住居跡床面と付近の第Ⅲ層から検出された土器群を一括した。今回検出された土器群の中では最も少なく、胎土に多量の繊維を含み焼性は比較的良好である。総数126点で、次の6類に分けられる。

B群 I 類〔第18図5~10, 13, 14・第32図17〕

HY50のDY123, 124 内とその付近から検出されたR右巻の撚糸文を縦位に転回した胴部片

で八幡原No.26遺跡から蕨状撚糸圧痕文,表裏繩文と併なって検出された例がある。米沢市松原遺跡からは検出されていないことから繩文前期初頭でも古い時期と考えられる。

B群II類〔第18図1~3,31,40,44·第32図5~9,18〕

斜縄文の土器群を一括した。 R  $\left\{ \stackrel{L}{L} \right\}$  、 L  $\left\{ \stackrel{R}{R} \right\}$  を主体に転回するものが大半を占めるが第17図 1 ・ 2 の様に L  $\left\{ \stackrel{R}{R} \right\}_{k}^{\left\{ \stackrel{k}{k} \right\}}$  を示す多条縄文を有するものもある。

B群Ⅲ類〔第18図4, 20~29, 32, 35, 37, 39, 41, 42, 第32図10, 1, 13, 14〕

ループ文, 結束羽状繩文のグループを一括した。ループ文はすべて R  $\left\{ \stackrel{L}{L} \right\}_{\ell}^{\ell}$  の 3 本多条を利用している。後の羽状繩文は L  $\left\{ \stackrel{R}{R} \cdot R \right\}_{\ell}^{\ell}$  の二本の原体を結束するもので 2 点検出されている。

B群Ⅳ類〔第32図3・4〕

L  $\{r$  の原体を圧痕するグループで、破片なので不明であるが蕨状撚糸圧痕文を有する可能性がある。関東の花積下層式、東北の上川名II式に併行する。

B群V類〔第18図33・第32図1・2〕

ヘラ状工貝を用いて「ハ」状を施文するグループで、3点検出されている。

8 群 VI 類 〔第18図36 · 43 · 45, 第32図15 · 16〕

半截竹管,棒状工貝で連続して突刷すもので,第18図36・37・45,第32図16は底辺から底面に施行され,第18図43,第32図15は胴部に施されている。

c C 群土器〔第19図~第28図, 第32図19~43, 第7図版~第15図版, 19図版〕

今回検出された土器群の中では最も多く検出されたグループで、遺構を中心に1,016点ある。この中にはHY49の炉跡から検出した2点の完形復元の他、MY16、同18、同61の埋設土器、土壙内より8点の完形復元土器が含まれる。本群の土器はすべて縄文中期中葉に位置付けられ、大木8 a 式、同8 b 式の2 時期に分けられる。

C群 I 類〔第20図 3,第22図  $1 \sim 4 \cdot 7 \cdot 9 \sim 11 \cdot 14 \sim 19$ ,第24図 $11 \sim 31$ ,第25図  $2 \sim 8$ , $14 \sim 23 \cdot 26 \cdot 32 \sim 35$ ,第26図 $28 \sim 32 \cdot 37 \sim 42 \cdot 44 \sim 50 \cdot 52$ ,第27図 $19 \sim 25 \cdot 29 \sim 31$ ,第28図  $1 \sim 3 \cdot 12 \cdot 17 \sim 21 \cdot 24$ ,第32図 $19 \sim 33$ 〕

無調製の粘土貼り付け文、沈線文を地文となる R  $\{L \cdot L\}_{R}$  R  $\{L \cdot L\}_{R}$  · L  $\{R\}_{R}$  を施文した後に施したもので、渦巻文、「の」字状文、平行線、斜行、縦位文様がある。大半は胴部、底部等の小破片であることから全体的な文様構成は明らかに出来ないが、第19図3の様に口縁部が内曲し、胴部でふくらむキャリパーに近い器形と思われる。大木8a式の仲間を一括した。ただしこの類の多くは大木8a式でも比較的大木8b式に近い。

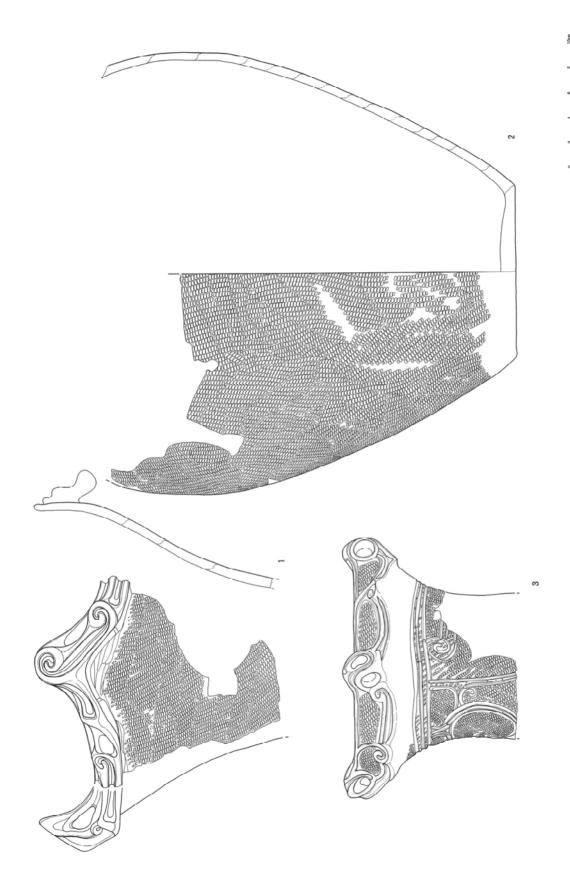
C群II類〔第20図 1 ,第19図,第21図 1 ,第22図21~28,第23図,第24図 1 · 4 · 6 ,第25図 27~30,第26図 1 ~ 8 · 11~15 · 17~25 · 27,第27図 1~14 · 17 · 18 · 32~39,第28図 5~10 · 14~16 · 22 · 23,第29図,第32図34~43〕

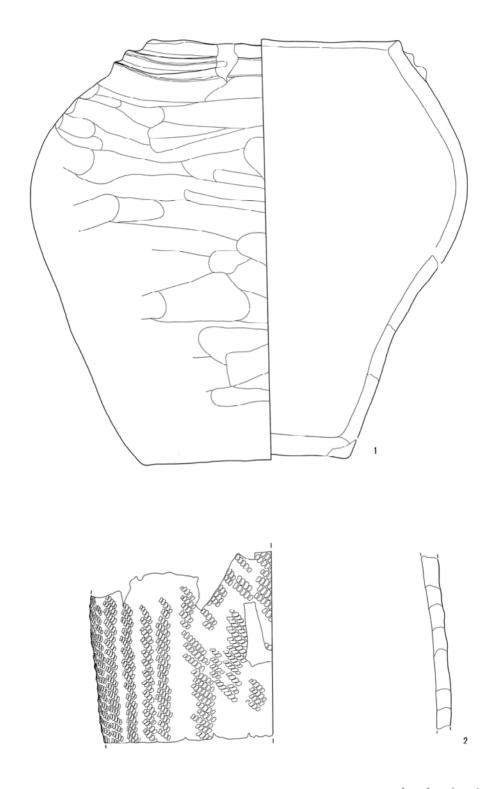


第18回 法将寺遺跡遺構内出土遺物(1)

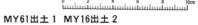
HY50出土 1~19 HY51出土20~39 HY52出土41~47

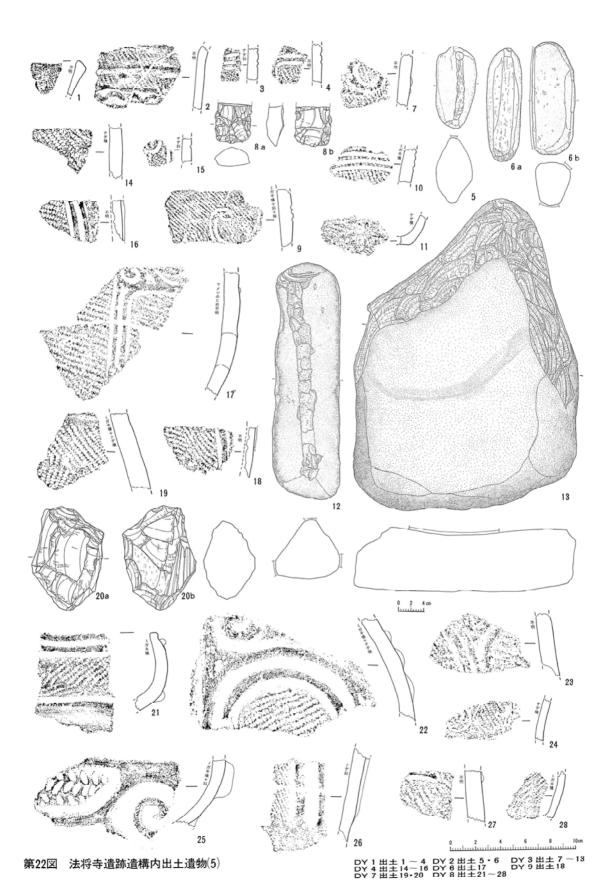
- 32 -



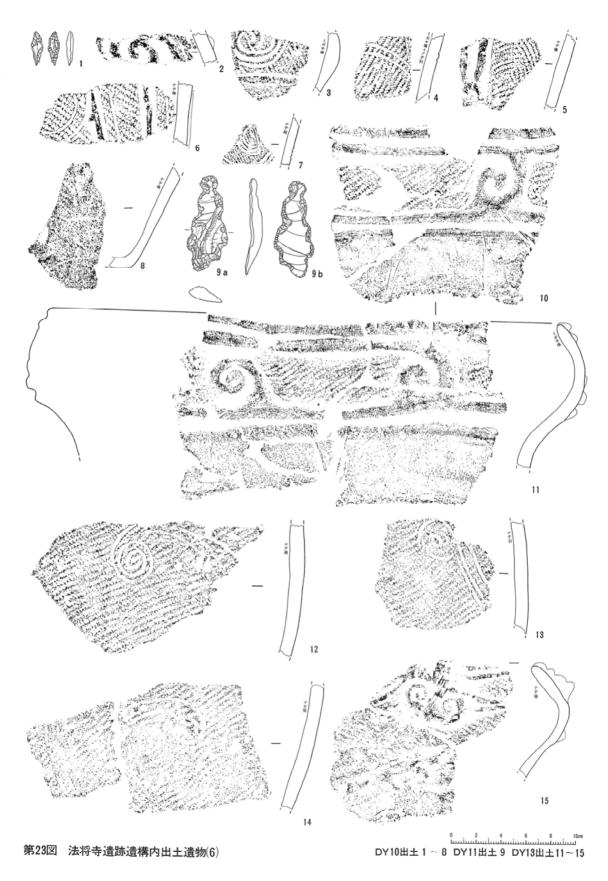


第21図 法将寺遺跡遺構内出土遺物(4)





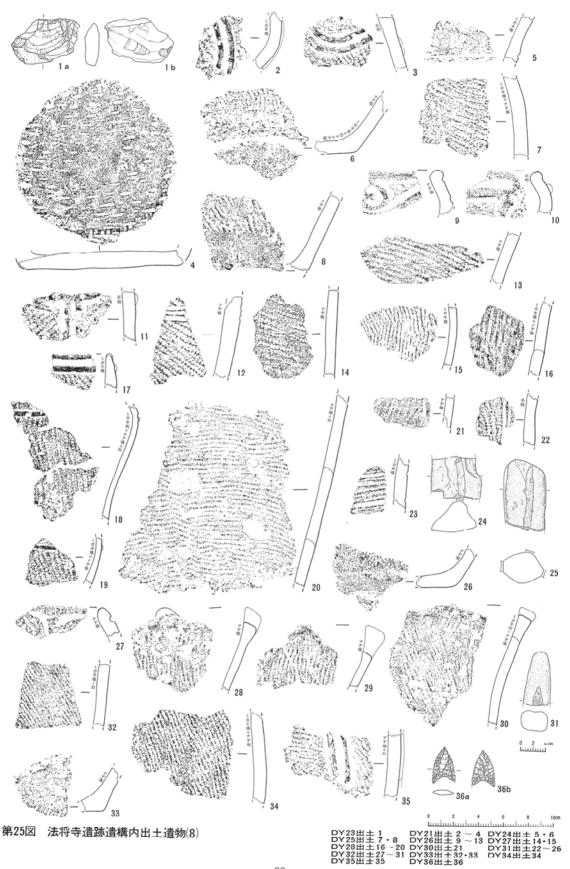
- 35 -



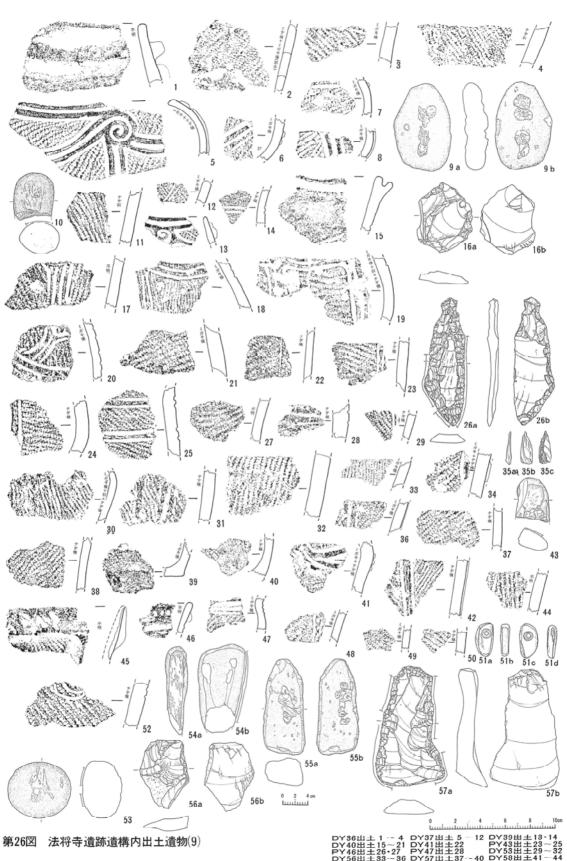
- 36 -

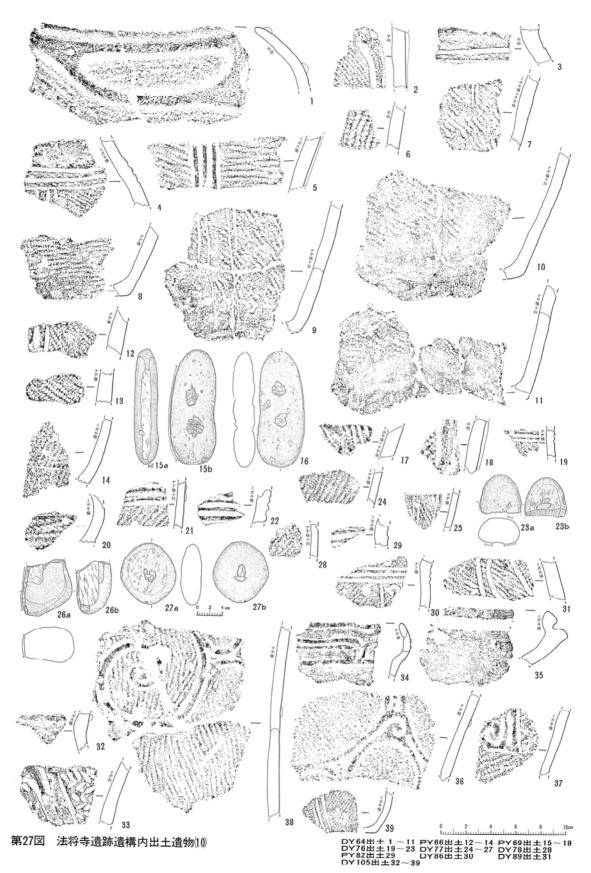


- 37 -

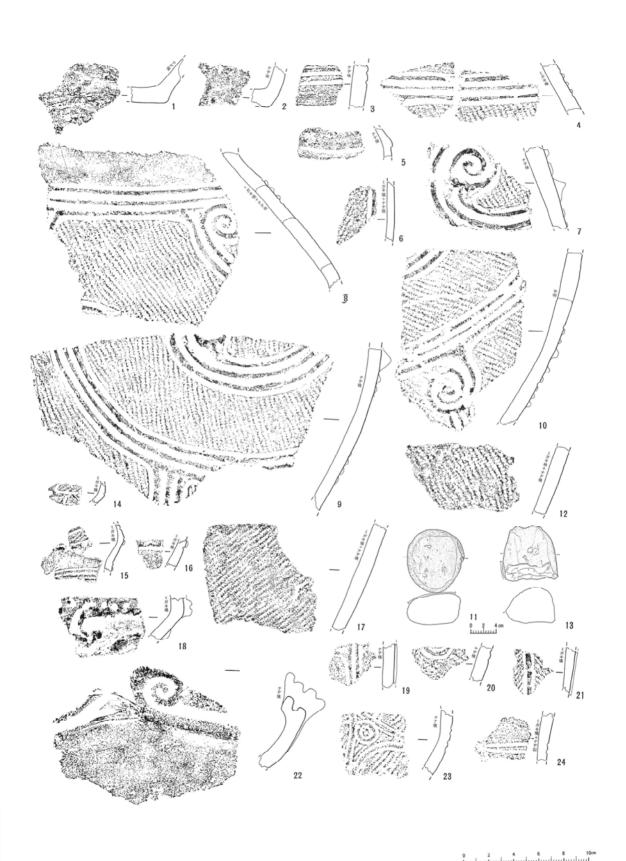


- 38 -





-40 -



PY106出土 1・2 PY107出土 3 DY 6 DY 113出土 12 DY 125出土 13 KY 127 DY 125出土 13 CY 127 DY 127 D

調整による沈線文と同様に調整貼付文を地文となるL{B・  $R \left\{ \begin{array}{c} L \\ L \end{array} \right\} \cdot L \left\{ \begin{array}{c} R \\ R \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{c} E \\ L \end{array} \right\} \cdot R \left\{ \begin{array}{c} R \\ R \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{c} L \\ L \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{c} R \\ R \end{array} \right\} \left$ 施した後に「の」字状渦巻文(第23図10~14他), 両端渦巻文(第 23図15, 第20図1他), 円状内渦巻文(第19図1), 嘴状内渦巻文 (第27図38・36・37他),「ハ」字状文(第22図25他), 懸垂文, 平行,斜行文等で構成するグループである。先のC群 I 類は無 調整を示すのに対し、本類は調整を主体とし、貼付文は発展し て隆線を呈するのも含まれている。 大木8 b 式に併行するグル ープを一括した。

C群Ⅲ類〔第19図 2, 第20図 2, 第21図 1 · 2〕

文様の飾られない、粗整土器をまとめた。第18図2は二条の 隆線を口唇部から口縁部にかけて横歩させ、4ヶ所にブリッチ を配して胴部を縦位のR { L で施文している。器形は口縁部が 胴部から内反する甕形土器である。第19図2は口縁部が破損し ているので不明であるが、 胴部がゆるやかにふくらむ深鉢形土 器とみられる。胴部を横位から斜位にかけて、下胴部から底部 にかけて縦のL {R 3本多条繩文で構成している。第20図 1は胴部最大径を上半部に置く甕形土器であり、口縁部に二各 の隆線を配し、先の第18図2に類する特徴がある。胴部は無文 でへラ調整を丹念に施している。

## d 土偶 〔第20図版 1〕

G30-4第II層から土偶頭部1点が検出されている。長顔で 顎がゆるやかに張り、眉から鼻にかけては粘土帯によって強調 され奥まった目元は一見、外人風の感じをうける。米沢市から の土偶の発見はこれまでに南原山崎遺跡、南原大壇遺跡、広幡 成島遺跡, 吾妻町台ノ上遺跡 (中期), 南原一本橋遺跡, 八幡原 No.30遺跡,八幡原No.31遺跡の7ヶ所があり、8ヶ所目の発見と なった。しかし、頭部の検出は少なく、今回で4例となる。

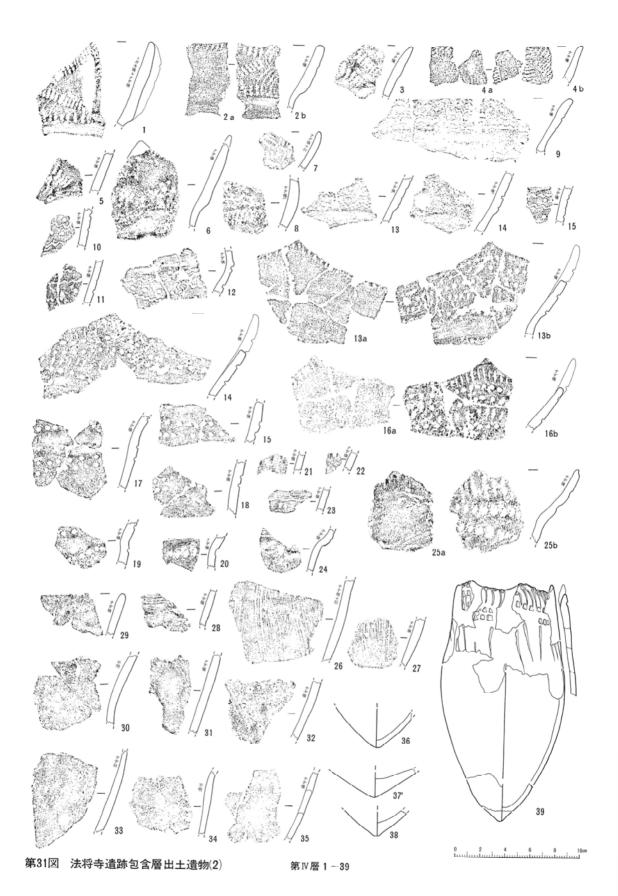
#### e 自然遺物

DY77のPY79より炭化したドングリ18点が検出されている。 炭化した自然遺物が検出されたのはDY77が唯一であり、注目 したい。

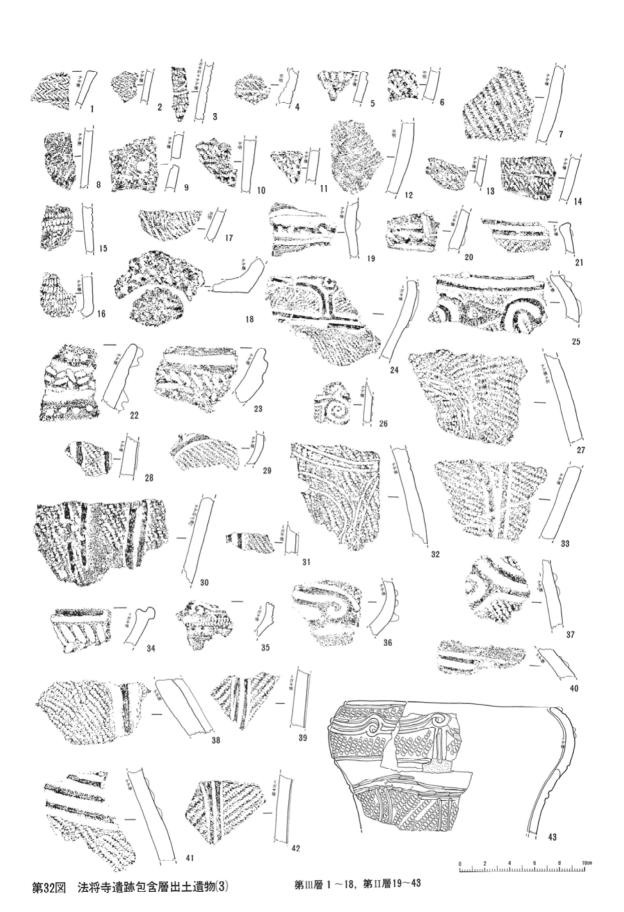




- 43 -



— 44 —



\_ 45 \_

#### 2) 石器 [第33図1~第35図6, 第22図版1~27]

出土した石器の中で、図面を必要と認識された石器36点、礫器44点について実測図を作成、さらに、第2表に石器形態分類表、第3表に石器計測表、礫器については第4表に礫器計測表を作成したので、詳細についてはこれらの表を参照願いたい。なを、石器、礫の分類に関しては次の報告書に記載している。〔米沢市埋蔵文化財報告書第6集33頁、同8集24頁~36頁、同11集24頁〕

形態別に出土した石器を列挙すると、I 群石器(石鏃) 5 点、II 群石器(尖頭器) 3 点、III群石器(石錐) 5 点、IV 群石器(石匙) 6 点、V 群石器(打製石斧) 1 点、VI 群石器(石箆) 1 点 VI 群石器(石槍) 3 点、VIII群石器(スクレーパー類) 8 点、X 群石器(欠損品を有する石器) 2 点、XI 群石器(石核) 1 点、XI 群石器(石製品) 1 点となる。剝片類では、H Y 50の覆土及び床面上部よりチップ片(2 mm~ 3 mm)が 221 点と他に96点が検出されている。

礫はC(凹石)11点, D(磨石)29点, E(石皿)3点, F(敲石)1点がある。以下各群石器についての説明に入るが、紙面の都合上簡単に述べたい。

a<sup>1</sup>群石器〔第33図1~5, 第22図版7~20, 26〕

b II 群石器〔第33図6~8, 第22図版24·25〕

3 形態に細別され、  $e^1$ 類のグループが 3 点、  $c^2$ 、  $d^1$ 類が各 1 点認められる。 D Y 30出土の第 3 2 図 1 を除き、縄文前期初頭の所産と言えよう。基部や先端部に欠損面を有す石器が 3 点ある。

第33図 6 は各年代に渡って不変的に認められる形態であり、 I 群石器の未完成品や製作途上あるいは製作断念石器で有り、基部が厚く、縁辺の調整も粗雑である。 7 も同様に年代幅をもって認められる。調整は 6 が両面調整を基本とし、 7 は片面調整品が多い。 8 は縄文早期中葉から前期初頭の範囲に位置する石器であり、八幡原遺跡群No.4、5 遺跡第 V 層出土の II 群石器 a¹類に類似する形態を呈す。

## c Ⅲ群石器〔第33図 9~13, 第22図版12~16〕

つまみ部の形成が明瞭でないタイプの石器で占められる。a<sup>1</sup>, a<sup>2</sup>類に細類された石器群13を除き小形であり、二等辺三角形状を有す。剝離調整面は錐部に集中しており、剝片素材の形態を残す。錐部の断面形態は三角形状をなすものが大半である。

d Ⅳ群石器〔第33図14~18, 第34図1, 第22図版6~10, 21〕

片面調整によって整形され、横形 ( $b^2$ 類)、縦形 ( $c^1 \cdot c^2 \cdot e^1 \cdot f^1$  類)に大別できる。15は縄文前期初頭の所産であり、早期の横形石匙とは異形である。なお早期の横形石匙は尖状を有し両面調整によって整形された特徴を持つ。18も早期中葉から同未葉に限定される石器である。17は米沢市三沢地区の松原遺跡出土の石匙に類似するものであり、縄文前期初頭と言える。33図 1 は D Y11の出土であり、縄文前期に考えたい。

e Ⅴ群石器〔第34図 2, 第22図版 6〕

			(川和山橋は、美一)							
		形態	特 徴	計測	平坪	挿図番号	II層	III層	IV層	遺構内出土
	c² 類		小形な形状を有し 基部が湾曲する。平 担な基部を有す c <sup>1</sup> 類 と区別した。	幅 (	0.4	第33図 2		1点		
I 群 石 器	d¹ 類		本類は、典形的な 二等辺三角形を有す。 基部の脚部は未発 達であるのが特徴で ある。	幅 厚さ	1.6 0.4	第33図 3				H Y 50−1 点
fid.	e¹ 類		基部が内湾し、脚部が外側に張り出す。 脚部は尖状を呈し 発達した稜線をもつ。	幅 厚さ	1.5 0.4	第33図 1 第33図 4 第33図 5		2点		DY36-1点
	a¹ 類		基部がゆるやかに 外湾を有す、小形な 類であり、尖状部は 極端に薄い。	幅	1.4	第33図 7				DY15-1点
II 群 石 器		-	中央部に最大幅を 持つ。基部が平担な 類をは類、基部が外 湾するタイプを ピ類 に細別した。	幅厚さ	2.8 0.5	第33図 8			1点	
	e <sup>l</sup> 類	-	不定形な三角形状 を呈す。剝離調整も 簡単である。 I 群石 器群に類似する。	幅	1.9	第33図 6			1点	
	a <sup>l</sup> 類		細身で小形な形状 を有す。平担な基部 は、無調整であり剝 離は尖状部に集中す る。	幅厚さ	3.3 0.5	第33図 9 第33図10 第33図12		1点	1点	DY56-1点
III 群 石 器	a <sup>2</sup> 類		尖状部(錐部)と つまみ部になる面を 有すものを a <sup>2</sup> 類とし た。 a <sup>1</sup> 類よりも大形 な形状をもつ。ただ しつまみ部は未発達。	長幅厚重	2.5 0.6	第33図13	1点			
	b <sup>1</sup> 類	A A	両端に尖状部を有 す形状を本類とした。 中央部が最も厚く また最大幅でもある。 両面調整が基本だ。	幅厚さ	2.8 0.9 0.6 1.0	第33図11				DY10-1点

## 〔Ⅳ群石器b²類~f類〕

				404	at 1:		Learn or by				un in access
Н		形態	特	徴		平均	挿図番号	II層	III層	Ⅳ層	遺構内出土
	b² 類		尖状部を 区別した。 調整は	形状を有す もつ b 類と つまみ部を 調整である。	幅厚さ	5.0 0.7	第33図15				HҰ51-1点
	c <sup>1</sup> 類		央部に最 先端部 びる縁辺 直線的に はゆるやき をえがき 先端部近 辺は互に	形を有持つには、 かなくのがには、 かなくのがのないのであれた。 ないがい でるめた はお アリ 縁に 部	幅厚さ	3.3 0.9	第33図14 第33図16		1点		DY46-1点
	c <sup>2</sup> 類		もたない 類と区別 剝離調 に集中し、 からの調想 まで達し	整は, b面 Ibの縁辺 がIIb布近 ている。 め,稜線は	幅 厚さ	2.4 0.7	第33図17				HY50-1点
群-	e¹ 類		して用いな調整をなっている。 つまみ 明僚でなが尖状を	けを素材と 縁より単単加えて整形 加えて整形が なく、先端半 有す。尖よ に張り出す。	幅 厚さ	2.7	第33図18			1点	
	f¹ 類		特異な形: のである。 意図的! た突起状: が特徴だ。 突起部!	に整形され を呈するの	幅 厚さ	3.2 0.9	第34図 1				DY11-1点

【V群a¹類,Ⅵ群j¹類,Ⅷ群a¹類~d¹類】

		形	態	特 徵	計測平均	挿図番号	II層	III層	Ⅳ層	遺構内出土
1	b <sup>1</sup>			基部がやや尖状を 有す。 刃部はゆるや かな丸味を帯び、基 部と刃部は結ぶ縁辺 は平行に走を。 刻離調整による。 両面 調整による。 両面 され、刃部を最後に調 整して、 から刃部が最も厚い。	幅 3.7 厚さ 1.9	第34図 2				DY13-1点
	j² 類			j¹類は、長方形を 呈すグループである。 j²類のタイプは両 端が丸味を持つ。ま た刃部近くに最大幅 がある。両面調整で 整形されている。	幅 3.9 厚さ 1.3 重さ 26.0	第34図3	1点			
VII	a¹ 類			槍形をお存し、、。 に尖状の石器に関して は次の特徴が面形はに対して は次の端のかが帯が、ボースの 時間もかを帯び、ボースの もの地域がでいた。 ものが、ボースの を見れて、ボースの には、が、ボースの には、が、ボースの には、が、ボースの には、が、ボースの には、が、ボースの には、が、ボースの には、が、ボースの には、が、ボースの には、が、ボースの にない、ボースの にない、ボースの にない、ボースの にない、ボースの にない、ボースの にない、ボースの にない、ボースの にない、ボースの にない、ボースの にない、ボースの にない、ボースの にない、ボースの にない、ボースの にない、ボースの にない、ボースの にない、ボースの にない、ボースの にない、ボースの にない。 にない、ボースの にない、で、で、で、で、で、で、で、で、で、で、で、で、で、で、で、で、で、で、で	幅 2.7 厚さ 0.3 重さ 10.0	第34図7			1点	
群	a² 類			両端が尖状を有ることではa <sup>1</sup> 類と類似する。 a <sup>2</sup> 類は、両端を結 ぶ縁辺が平行に延ひ ていることでa <sup>1</sup> 類と 相異し、細類した。	幅 1.2 厚さ 0.9 重さ 4.0		,			HY50-1点
	d¹ 類			WI群石器で欠損面を持つグループを本類とした。				1点		

## 〔Ⅷ群b²類~Ⅰ¹類,刈群b¹類,刈群a²類〕

Г	Τ	形	態	 特	徴	計道	則平均	挿図番号	II層	Ⅲ層	IV層	遺構内出土
	b² 類			るグルーフ b <sup>1</sup> 類は, 最大幅があ	中央部に るタイプ。 ) 部近くに っり, さら	幅 厚さ 重さ	4.6 2.3	第35図 3	1点			
VII.	g <sup>2</sup> 類			ープをgl類 の形状をも gとした。	つものを lとなる簡 lのコーナ	幅厚さ	4.2	第35図 5	1点			
群	j¹ 類			を加えたク 本類とした	。 いられる 形で縦形	幅厚さ	4.4 0.5	第35図 2			1点	
	k¹ 類			する刃部を	調整であ 去を加え	幅 厚さ	4.4 1.6	第34図 4	1 点			
	ℓ¹ 類			としている	有する緑 が特徴で	幅 厚さ	5.6 1.2	第35図 1				DY64-1点
	b¹ 類			石核を本 自然面を有 面を整形す く,縁辺よ 業を加えて	ることな り剝離作	幅	5.8 4.0	第35図 4				DY7-1点
	a² 類			小形の玉 とした。 硬玉質で 緑色である。		長幅厚重	1.5 0.8	第35図 6				DY62-1点

## 第3表 法将寺遺跡出土石器計測表

## I 群石器

(長さ・幅・厚さom・重さ g)

通し No.	遺物No.	挿図番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石	材	形態	剝 離 調 整	備考
1		第33図 2	4 -29	III	2 .1	(1.4)	0.4	0.8	頁	岩	I群c²類	I — IV a b+ R $^{\rm 4.5}$	基部欠損
2	B Z 19	第33図 3	H Y 50		(2.9)	1.6	0.4	1.0	頁	岩	I 群 d¹類	I $\sim$ III a b+ R $^{4.5}$	尖端部欠損
3		第33図1	D Y 36		2.9	(1.9)	0.4	1.0	頁	岩	I群 e <sup>1</sup> 類	I $\sim$ III a b+ R $^{4.5}$	基部欠損
4	B Z 28	第33図 4	3 -28	III	(2.7)	1.4	0.4	2.0	頁	岩	I 群 e¹類	$I \sim III a b + R^{4.5}$	尖端部欠損
5	N O 448	第33図 5	3 -27	III	2.8	1.4	0.5	2.0	頁	岩	I群 e¹類	I ~ III a b+ R 4.5	

## II群石器

通し No	遺物No.	挿図番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石	材	形態	剝 離 調 整	備考
6		第33図 7	D Y 15		2.5	1.4	0.3	0.5	頁	岩	II類 a¹類	III b+ R <sup>5.6</sup>	a 面無調整
7		第33図8	3 -29	IV	4.1	2.8	0.5	5.0	頁	岩	II群 c¹類	I $\sim$ III a+R <sup>8</sup> I $\cdot$ II $\cdot$ IV a+R <sup>7.8</sup> III a+R <sup>4.5</sup>	
8		第33図も	6 -35	Ш	2.2	1.9	0.4	2.0	頁	岩	II群 e <sup>1</sup> 類	III a b+R5.6 I a+R5	

## Ⅲ群石器

通し No.	遺物No.	挿図番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石	材	形態	剝 離 調 整	備考
9		第33図10	4 -29	IV	3.1	1.2	0.5	3.0	頁	岩	III群 a <sup>1</sup> 類	$I \cdot II \cdot a  b + R^{4.5}  II  b + R^5$	自然面有り
10	BZ7	第33図12	3 -29	Ш	3.7	1.6	0.5	3.0	頁	岩	III群 a¹類	I ·II a b+ R 5.6	切断面有り
11	B Z 16	第33図 9	D Y 56		2.7	1.0	0.5	1.0	頁	岩	Ⅲ群 a¹類	II b+R4~6	切断面有り
12	BZ3	第33図13	5 - 35	II	4.1	2.5	0.6	5.0	頁	岩	Ⅲ群 a²類	I · II a · b+ R 5~7	バルブ除去
13	B Z 10	第33図11	D Y 10		2.8	0.9	0.6	1.0	頁	岩	III群 b¹類	I • II • a b+ R 4.5	切断面有り

## Ⅳ群石器

通し Na	遺物No.	挿図番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石	材	形態	剝 離 調 整	備考
14	B Z 21	第33図15	H Y 51		3.7	5.0	0.7	10.0	頁	岩	Ⅵ群 b²類	$I \sim III b + R^{8.9}$ IV $a + R^{7 \sim 9}$	
15	B Z 12	第33図14	D Y 46		10.2	3.3	0.9	28.0	頁	岩	₩群 c¹類	I ~III a• b+ R 7~9	使用痕有り
16	B Z 8	第33図16	5 -31	Ш	(2.2)	(1.4)	(0.4)	2.0	頁	岩	₩群 c¹類	I • II • a • b + R 5.6 VI b + R 5	欠損
17	B Z 25	第33図17	H Y 50		7.8	2.4	2.4	15.0	頁	岩	VI群 c²類	I ~III a b+R4~6 I•IIa+R7~9	使用痕有り
18	B Z 29	第33図18	3 -29	IV	7.9	2.7	2.7	10.0	頁	岩		$I \sim IV ab+R^{4.5} I \cdot II b+R^{8.9}$	縦形剝片使用
19	BZ9	第34図 1	D Y 11		7.8	3.2	3.2	17.0	頁	岩	W群f¹類	I · II a + R 4~6 I ~ III b + R <sup>7~9</sup>	縦形剝片使用
												I ·II b+R <sup>9</sup>	

## V群石器

通し No.	遺物No.	挿図番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石	材	形 態	剝 離 調 整	備考
20	B Z 11	第34図 2	D Y 13		8.9	3.7	1.9	49.0	頁	岩	V群b¹類	I $\sim$ III a b IV a+R $^{7\sim9}$	

## Ⅵ群石器

通し No.	遺物No	挿図番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石	材	形態	剝 離 調 整	備考
21	B Z 30	第34図 3	5 -20	II	5.5	3.9	1.3	26.0	頁	岩	VI群 j²類	I • II a b+ R <sup>7</sup> ~9 III b+ R <sup>7.8</sup>	ハジケ面有り

## Ⅷ群石器

通し No.	遺物No.	挿図番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石	材	形態	剝 離 調 整	備考
22	B Z 27	第34図 7	3 - 29	IV	7.9	2.7	0.9	10.0	頁	岩	Ⅷ群 a¹類	I·II ab+R1~3 R4~6	
		第34図 9			(6.4)	1.2	0.9	(4.0)	Ţ	岩	Ⅷ群 a²類	<b>VII·II</b> a b+ R 4.5	両尖端欠損

## Ⅷ群石器

通し No.	遺物No.	挿図番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石	材	形態	剝 離 調 整	備考
24	810	第34図 8	9 -22	III	(3.2)	2.3	0.9	0.8	頁	岩	Ⅷ群 d¹類	I · II a b+ R 5.6	両端部欠損

## Ⅷ群石器

通し No.	遺物No.	挿図番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石	材	形態	剝 離 調 整	備考
25		第35図 3	5 -29	II	6.1	4.6	2.3	52.0	頁	岩	WII群 b²類	III b+R <sup>7~9</sup> I·II·Ⅳ+R <sup>9</sup>	
26		第35図 5	4 -22	II	6.1	4.2	0.8	29.0	頁	岩	Ⅷ群 g²類	II∼VI b+R <sup>7 ~ 9</sup>	
27		第35図 2	5 -32	IV	4.5	2.6	0.5	5.0	頁	岩	Ⅷ群 j¹類	II b+R1	
28	BZ6	第34図 4	5 - 29	II	5.5	4.4	1.6	37.0	頁	岩	Ⅷ群 k¹類	I~W b+R7~9 II a+R8.9	
29	B Z 20	第35図 1	D Y 64		9.7	5.6	1.2	81.0	頁	岩	WII群 e¹類	I ~ IV b+ R 7 ~ 9	使用痕有り

## X群石器

通し Na	遺物No.	挿図番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石	材	形態	剝 離 調 整	備 考
30	B Z 2	第34図 5	5 -29	II	(3.0)	2.6	0.7	8.0	頁	岩	X群a <sup>1</sup> 類	I ~III a b+ R 7 ~ 9	欠損面有り
31		第34図 6	DY3		(3.3)	2.9	1.4	16.0	頁	岩	X群 a <sup>1</sup> 類	I ~III a b+ R 7 ~ 9	欠損面有り

## XI群石器

通し No.	遺物No.	挿図番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石	材	形態	剝	離	調	整	備	考
32		第35図 4	D Y 7		8.3	5.8	4.0	200	頁	岩	XI群 b¹類	R <sup>9</sup>				化石面有	ŋ

## Ⅲ群石器

通し No	遺物No.	挿図番号	出土地区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石	材	形態	剝 離 調 整	備	考	
33	B Z 17	第35図 6	D Y 62		2.8	1.5	0.8	0.5	玉	髄	XII群 a²類	研磨による擦切痕有り	穴外0.8,	内0.3	

# 第4表 法将寺遺跡出土礫計測表 (長径,短径,厚さ㎝,重さg)

通しNa	遺物No.	挿図番号	出土地区	層位	形態	継面	細	分	長径	短径	厚さ	重さ	石	材	備	考
1		第23図 9	D Y 16		С	II A	IB+C8		(10.0)	5.6	2.8	630	石英粗	面岩	欠損面有	r)
2		第18図 6	H Y 49		С	II A	I A + C <sup>7</sup>		11.2	7.5	4.7	1,320	石英粗	面岩		
3		第26図16	P Y 69		С	II D	IB+C1	+D'1	19.0	7.3	4.0	730	安山岩			
4		第26図23	D Y 76		С	II A	IB+C1-	+D'2	(6.3)	(6.8)	4.1	260	安山岩		欠損面有	ŋ
5		第26図27	D Y 77		С	II A	I A + C2	+D'1	(10.0)	9.1	3.4	370	安山岩		欠損面有	ŋ
6		第24図31	D Y 32		С	II A	IB+C1		(8.5)	4.4	3.2	170	安山岩		欠損面有	ŋ
7		第25図 9	D Y 37		С	II D	I A+C11		14.2	9.2	4.0	1,530	安山岩	-		
8		第25図55	D Y 64		С	II A	I A + C13		15.2	6.9	4.4	610	石英粗	面岩		
9		第25図53	D Y 63		С	II A	I A + C1 -	+ D′ 1	10.3	9.1	6.5	650	安山岩			
10	214	第36図1	3 -27	П	С	II C	$IA+C^2$		9.3	8.6	3.2	330	安山岩			
11		第36図 2	3 -29	II	С	II C	I C + C13	+D'1	17.7	8.2	6.5	1,000	安山岩			
12		第23図8	D Y 15		D	II C	I B + D'	2	(9.5)	6.1	4.9	430	花岡閃	緑岩	欠損面有	ŋ
13		第23図 2	D Y 13		D	II A	IA+D'	1	(5.0)	7.2	2.7	150	安山岩		欠損面有	ŋ
14		第21図 5	D Y 2		D	IIΒ	IB+D'	1	18.3	5.8	5.7	920	石英粗	面岩		
15		第21図 6	D Y 2		D	II C	I B+D'	2	17.7	8.2	6.5	1,000	石英粗	面岩		
16		第17図12	H Y 50		D	II A	IC+D'	2	15.4	7.9	8.3	1,540	安山岩			
17		第17図16	H Y 50		D	II C	I B + D'	1	30.5	11.1	13.0	3,750	安山岩			

通しNo.	遺物Na	挿図番号	出土地内	層位	形態	継面	細	分	長径	短径	厚さ	重さ	石 材	備考	Ę
18		第17図17	H Y 50		D	ΠА	I B+D' 1		15.5	8.9	8.6	1,420	石英粗面岩		
19		第17図18	H Y 50		D	ΠА	IB+D'2		12.9	8.1	3.8	470	安山岩		
20		第17図46	H Y 52		D	ΠC	IB+D'1		16.2	6.1	6.8	1,310	石英粗面岩		
21		第17図47	H Y 52		D	II C	IB+D'1		13.8	4.9	6.2	510	安山岩		
22		第27図11	D Y 12		D	II D	IA+D'1		10.3	9.2	5.2	750	安山岩		
23		第27図13	D Y 125		D	II A	IA+D'1		( 9.2)	8.9	5.7	540	安山岩	欠損面有り	
24		第26図26	D Y 77		D	II A	IA+D'2		(9.2)	8.0	5.6	580	安山岩	欠損面有り	
25		第24図24	D Y 31		D	II C	I B+D' 2		( 6.8)	8.2	5.1	300	安山岩	欠損面有り	
26		第24図25	D Y 31		D	II A	I B + D' 3		(10.3)	9.2	5.2	750	安山岩	欠損面有り	
27		第25図10	D Y 37		D	II A	IA+D'1		(7.5)	6.6	6.2	370	安山岩	欠損面有り	
28		第25図43	D Y 58		D	II D	I B+D' 1		(7.3)	5.4	4.9	240	安山岩	欠損面有り	
29		第25図54	D Y 64		D	II D	I B + D' 1		(14.0)	8.0	3.6	590	安山岩	欠損面有り	
30		第36図 3	2 -35	Ш	D	II D	I B+D' 1		(9.4)	7.1	4.6	470	安山岩	欠損面有り	
31		第36図 4	6 -29	Ш	D	ПС	IB+D'1		(9.6)	5.3	5.0	350	安山岩	欠損面有り	
32		第36図 5	5 - 32	Ш	D	ПС	I B+D' 1		17.4	7.8	6.1	980	安山岩		
33		第36図 6	3 -30	IV	D	II C	IB+D'1		(10.2)	7.0	7.1	620	安山岩	欠損面有り	
34		第36図 7	4 -31	IV	D	II C	IC+D'1		(11.2)	6.3	5.5	360	安山岩	欠損面有り	
35		第36図 8	5 -29	II	D	II C	I C + D' 1		13.4	9.0	7.1	510	安山岩	欠損面有り	
36		第36図 9	3 -29	IV	D	II C	IB+D'1		(10.3)	8.5	7.8	750	安山岩	欠損面有り	
37		第36図10	4 -30	II	D	II C	IB+D'1		(7.7)	5.6	5.5	280	安山岩	欠損面有り	
38		第36図11	3 -25	II	D	II D	I A+D' 2		9.2	9.2	3.2	270	安山岩		
39	529	第36図12	5 - 38	II	D	II D	IB+D'1		9.7	4.4	1.8	1 100	安山岩		
40		第36図13	4 -30	П	D	IIΒ	IB+D'1		(7.7)	5.6	5.5	280	安山岩	欠損面有り	
41		第21図13	D Y 3		E	II D	I A + 2 E		52	37	9.5	5,200	石英粗面岩		
42		第36図14	4 -30	II	E	ПD	I B + 2 E		39.6	26.9	8.8	3,500	石英粗面岩		
43		第36図15	5 - 32	II	E	II D	I B + 2 E		32.2	26.6	9.0	3,100	石英粗面岩		
44		第21図12	DY3		F	пр	IB		38.4	10.6	9.5	2,100	花岡閃緑岩	3面に敲痕を	有す

剝離調整や、刃部形態の観察により、 V 群石器とした。刃部の再調整は加えられておらず、完成時の形態を有すものと考えたい。 基部が若干ねじれた形状を呈す。

## f VI 群石器〔第34図3, 第22図版2〕

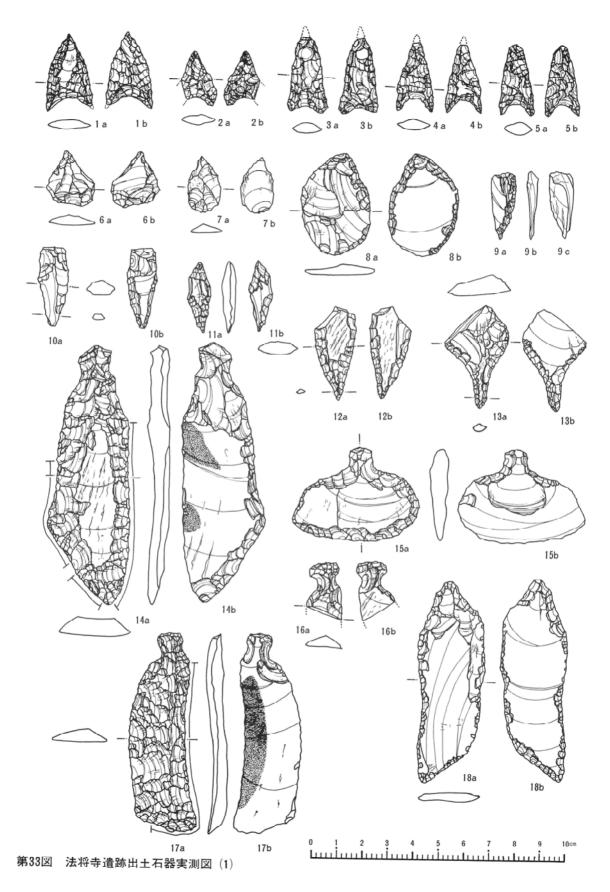
このタイプの石器は、繩文早期中葉から多く認められ、各時代に渡って存在する。

# g Ⅷ群石器〔第34図7~9, 第22図11, 22〕

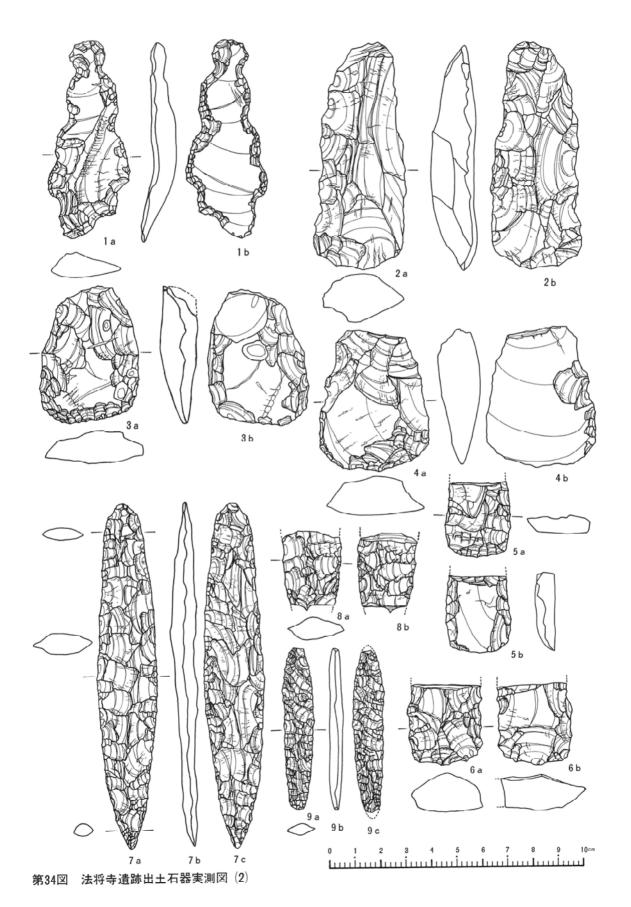
7は早期末葉の所産であり、これを下だらない形態と言えよう。 9は前期初頭であり 7との相異が感じられる形態を有す。 8 は、両端が欠損していることから全容は不明といわざるをえない。 h VIII群石器[第34図 4、第35図  $1 \sim 3 \cdot 5$ 、第23図  $5 \cdot 10$ 、第24図 1,第25図 16,第22図版  $1 \cdot 3 \sim 5$ 〕 本群は、不定形を有すことから、12形態に細別している。本遺跡からは、 5 形態が出土した。

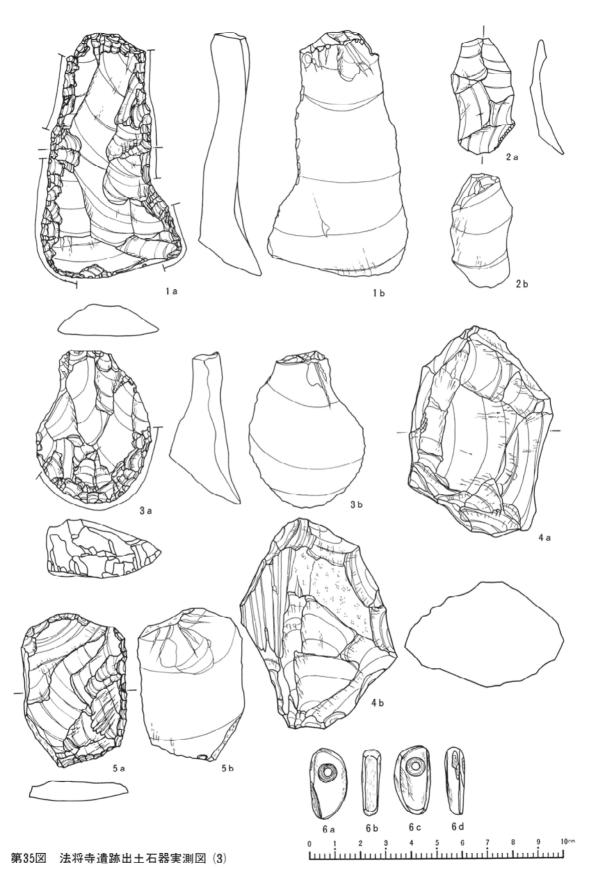
# i **Ⅲ**群石器〔第35図6, 第22図版28〕

今回調査区の唯一の磨製品であり、DY62から出土した。硬質な石材を使用し、全面を研磨によって仕上げている。上端には外径0.8cm、内径0.3cmの穴を有孔した。装飾品(ペンダント)である。

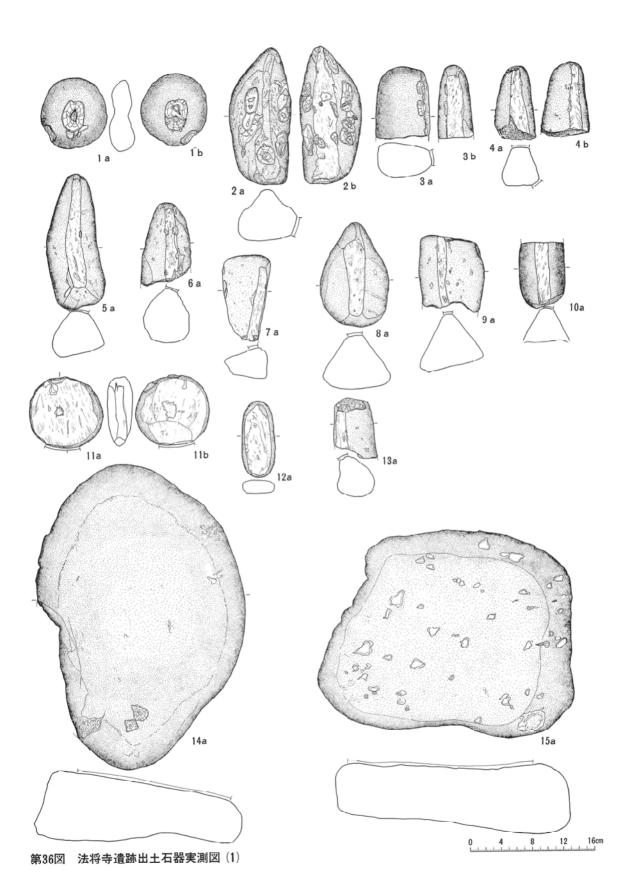


- 54 -





- 56 -



- 57 -

#### 5 ま と め

今回調査した法将寺遺跡は道路敷地内と云うこともあって、ごく限られた範囲の調査であったことから十分な資料を得ることが出来なかった。しかし、発掘した成果から本遺跡の保有する貴重な財産を確認したことは大きく、米沢市内における重要遺跡の一つとして位置付けられることであろう。さて、これまでに述べて来た成果を基に遺構、土器、石器に分けて要約し、まとめとする。

1. 遺構では縄文前期初頭の竪穴住居跡が注目される。山形県内では大石田町庚申町遺跡、長井市 長者屋敷、同須刈田遺跡、米沢八幡原No26遺跡、同松原、大壇遺跡に次ぐもので、3~4mの方 形プランに近い形状を占めしていたのに対し、法将寺発見の竪穴住居跡は長方形プランを特徴と している。また関東地方に多くみられる住居跡は方形でかつ、周溝を配するものが主であり、法 将寺を含む県内の前期初頭の住居跡は周溝を有するものは存在しなく、地方的特質を有するもの として注目されよう。また最近、南陽市教育委員会の手によって須刈田遺跡の発掘調査が実施さ れ、長方形プランを有する石囲い炉を持つ縄文前期初頭の住居跡が発見されたと云う、筆者らの 実見では住居跡とするには相当問題があると思われる。

2. 土器群としては縄文早期の土器類が注目される。分折の結果、縄文早期の中葉後半に位置付けられ、田戸上層、大寺、常世、子母口式に類例をみいだすことができる。しかも同一層内からの検出であり、若干の年代差はあるにしても、ほぼ近い時期の範疇で位置付けられる。

昭和55年に調査した桑山№ 5 遺跡からは日計式や、稲荷台式(同時期ではない。念のため)の I 期とした住居跡とともに V 期とした野島期までの18基の竪穴住居跡が検出された。この中で II 期に田戸下層と明神裏III式を併行させ VI 期に田戸上層式を位置付けた。また大寺式もこの類に位置付けていたが、田戸上層と明神裏III式との年代的な序列は不自然であった。今回の法将寺遺跡からは田戸上層、大寺、常世が併行して確認され、明神裏III式が含まれていないことから明確に区別出来そうである。

3. 石器も時期別に応じて、特徴的に変化している。ことに石匙は早期の第Ⅳ層からはツマミ部を有さない両面加工のⅣ群 e 1 類が検出され、前期では明確にツマミ部を有してくる。またHY51から横型の石匙1点が検出された。前期の横型石匙は福井県鳥浜貝塚の様に西日本に多い型態であるが横型特有の明瞭な両面調整調は行なわれず片面調整を主体とした東北地方の特徴をもつ。もう一つDY11から検出された使用痕をもつ鋸歯状石匙1点がある。覆土からの検出で混入したことも考えられるが中期と考えたい。県内では同様な型態を示す発見が少なく貴重な資料である。

以上簡単に要点をまとめたが、種々な問題がある。この点は近い将来の2次調査の課題として 残しておく。最後に発掘調査を実施するに当り色々な面でお世話になった地元の方々、米沢市農 林課、山形大学学生諸君に対し心から感謝の意を表したい。 図 版





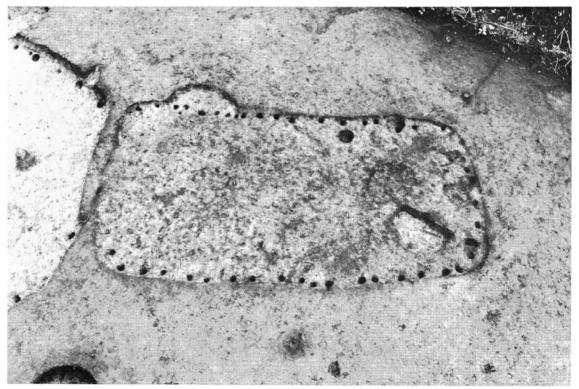
▲第Ⅲ層面遺構全景



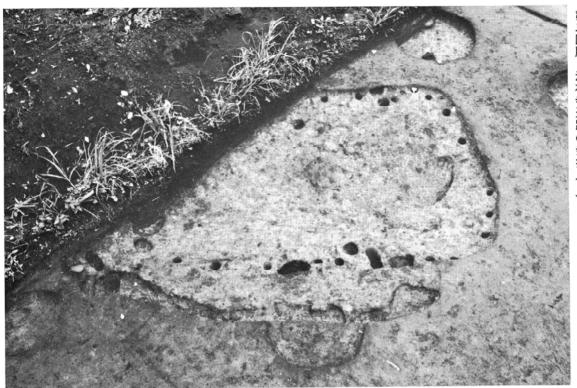
▲第Ⅱ層面遺構全景



▲**HY**5|全景



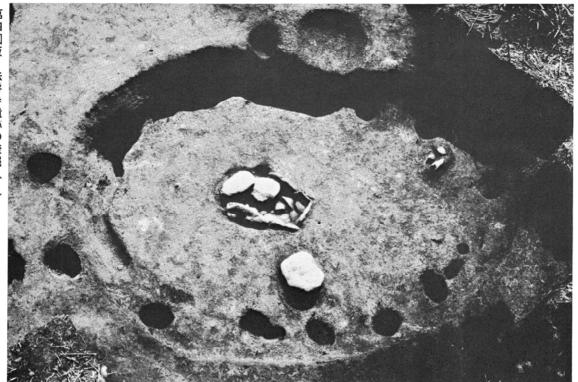
▲**HY**52全景



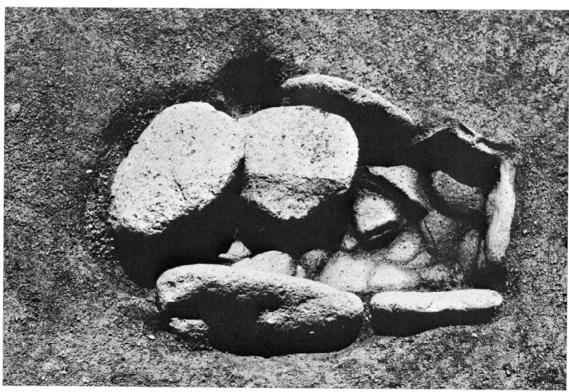
▲**HY**50全景



▲BYI36全景



▲**HY**49全景



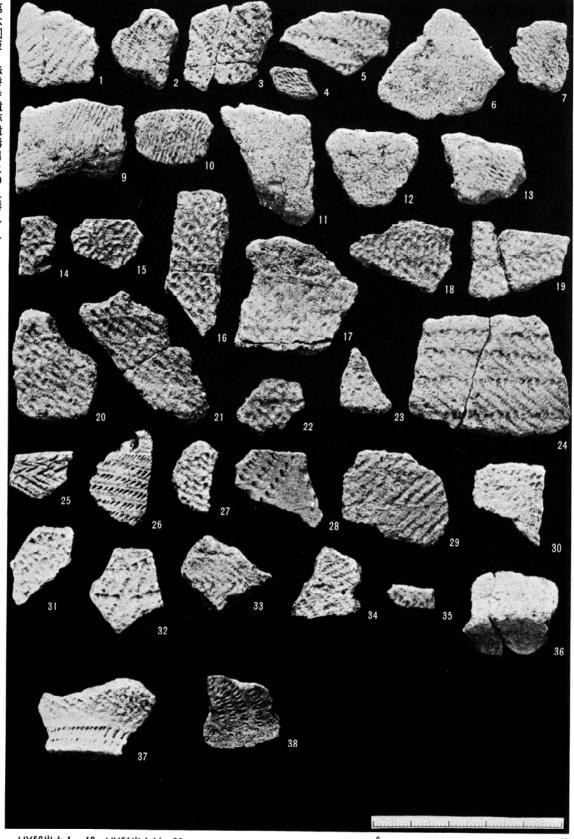
▲I Y94全景

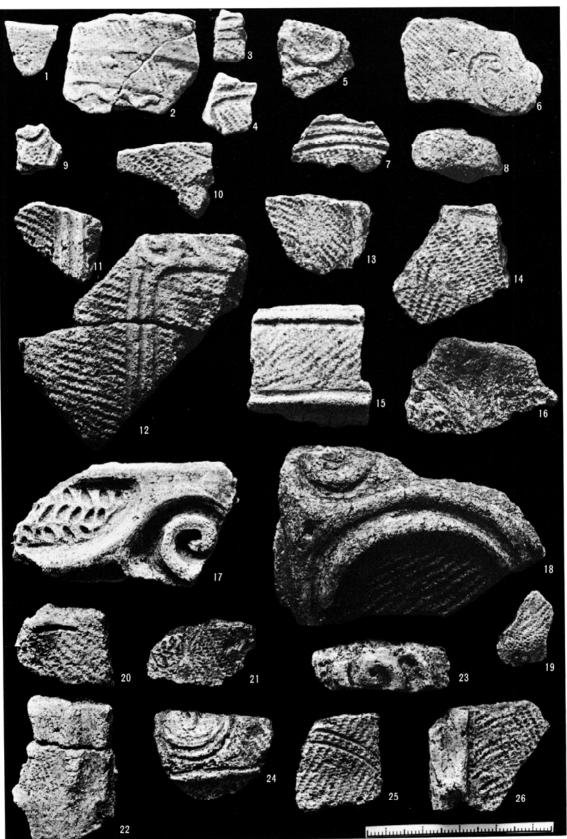


▲DYI3遺物出土状況

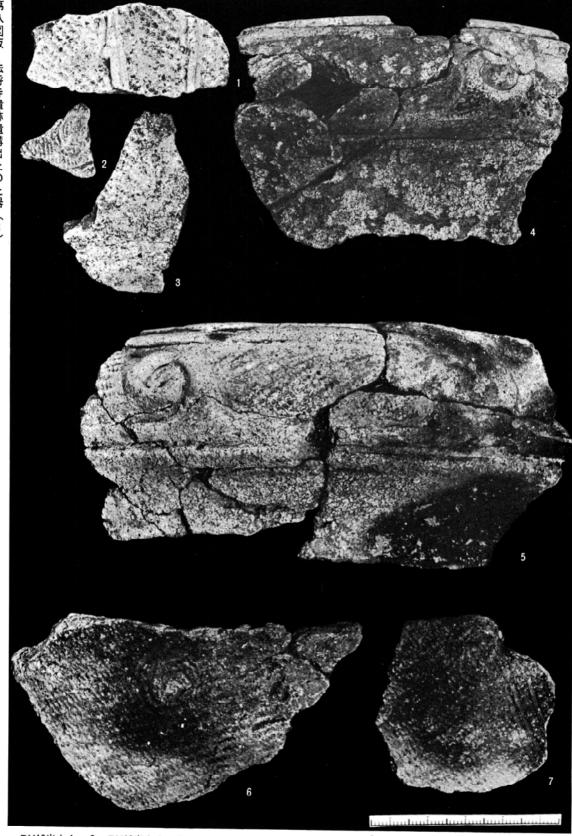


▲DY 3 全景





DY 1 出土 1 ~ 4, DY 3 出土 5 ~ 8, DY 4 出土 9 ~ 11 DY 6 出土 12, DY 9 出土 13, DY 7 出土 14, DY 8 出土 15~22 DY 10出 + 23~26



DY10出土 1  $\sim$  3, DY13出土 4  $\sim$  7

